
~ 夢は現となりて ~

シクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～夢は現となりて～

【Nコード】

N8428D

【作者名】

シクル

【あらすじ】

訳がわからない。気づけば変な世界にいるし、身体は女になっているし。夢幻世界？何もかもが非現実的すぎる。

第一章「白い世界」

夢を見た

不思議な夢

真っ白な世界

鏡があつた

大きな鏡

鏡に映る私

それは見慣れた私じゃない

あなたは誰？

私はあなた

あなたは私

私はあなたであなたも私

不思議な夢

美奈

眠い。

昼間・・・というか常に眠い。

この異常な眠たさはやはり夜更かしのせいだろうか・・・。

視界に入るのは俺の前の席の奴の後ろ頭と相手を眠りにつかせる呪文を唱え続ける社会科担当の教師。

そしてその呪文を文章化して表示している黒板。

余計に眠くなる。

俺は河合晃。かわいこう

中二。

自分で言うのもアレだが正確はわりと冷静。

とはいってもクールな訳じゃなく、簡単には取り乱さないとかそんな感じだ。

身長は少し高めだが最近伸びてない。

勉強、部活ともに無気力。

大した記録は一つも残してない。

そんな俺は今日も居眠りしながら社会の授業を・・・

ビッ！

風を切る音がする。

殺気を感じる。

俺は頭をあげ、瞬時に机の上の下敷きで顔を守った。

ドスッ！

下敷きに硬い何かあたり、白い粉が散る。

「河合イイツ！またお前かアアアッ！ワシの授業中に居眠りしとる

愚か者はアアッ！」

社会科担当。

通称 きらくおきな 鬼畜翁。

授業中に居眠りしたり他のことをする人間に凄まじいスピードのチヨークを投げる。

そのチヨークを完全に防げる者はいない。

唯一、俺を除いて。

「毎日毎日同じ場所に投げたら簡単に防がれますよ先生」

「馬鹿たれッ！防ごうとするのはお前だけじゃッ！」

結局授業のあと職員室に連行。

追加の宿題と説教をたっぷりもらって俺は教室に帰った。

「お前もいい加減寝るのやめろよ」

帰ってきた俺にそう言ったのは須川智也。すがわともや

俺の友人。

部活が同じで気も合う。

正確は温厚だが怒るときは怒る。

「今日は寝てないぜ。寝ようとしただけだ」

「一緒だろ」

須川は笑いながら言うと言った中に教科書等を詰めた。

「HR始まるぞ。お前も帰る用意しとけ」

「あいよ」

俺はロッカーまで鞆をとりに行った。

学校からの帰り道。

須川や他のみんなと馬鹿な話で盛り上がり、騒ぎながら帰る。いつも通り。

家に帰ると俺はすぐに制服を脱いで風呂へ直行。

晩飯食って適当にネットサーフィン。

他の人より多い宿題を全てこなし、俺はベッドに入った。書き取りの宿題が多すぎて指が痛い。

「眠く・・・ならないッ！」

授業中は眠いのにベッドの中は眠くないというイリュージョン。
こういう時は羊を数えると良いらしいが俺の場合は・・・

意表をついてやぎ。

やぎが一匹

やぎが二匹

やぎが三匹

羊も一匹

やぎが四匹

羊も二匹

うなぎが一匹

羊が五匹

うな井が一杯

うな井がいっぱい。

やべえ

うな井がいっぱいだ！

腹減ってきた。

今日の晩飯足りなかったしな・・・。
意識が遠のいて行った。

夢？

これは・・・

目が開く。

ベッドから見える天井じゃない。

それ以前に・・・姿勢が違う。

地べたに座っている？

ただ座っているだけなのに違和感がある。

「ここは・・・」

白かった。

真っ白。

他には特になにも見当たらない。

「どうなってるんだ・・・？」

声に違和感がある。

辺りを見回した。

頭をふると何かが頬をくすぐる。

髪・・・か？

頬をくすぐる何かにそつと触れる。

サラサラした感触。

「こんなに髪長かったか？俺・・・」

鏡があると助かるのだが・・・。

そう思った途端目の前に鏡らしき物。

流石夢。

俺の夢。

思い通りだぜ。

明晰夢ってやつだろ？

今の自分を確認したらとりあえず鬼畜翁でも召喚して日頃の恨みを

晴らすとするか・・・

そんなくだらないことを考えながら鏡に近づく。

「は・・・？」

腰まで伸びたサラサラの長い髪。

ほんのり膨らんだ胸。

華奢な体つき。

かわいらしい大きな瞳。

赤いブレザーにミニスカート。

これらの特徴が導き出す結論。

「何で女になってんだよ」

続く

第二章「由愛」

落ち着け。

落ち着け俺。

夢だから。

大丈夫だから。

女になっても大丈夫。

多分。

俺は鏡に映る少女（俺？）をまじまじと眺めた。

あ、意外とかわいい。

「自分じゃなかったら惚れてるぜまったく」

俺はため息をついた。

やはり鏡の中の美少女もため息をつく。

俺は改めて自分の体を見た。

どうみても俺じゃねえよ。

しかし実際のところ自分である。

「夢にしちゃ感覚がリアル過ぎないか・・・」

俺は今までに何度も夢を見たがこんなにリアルだったことはない。

あ、明晰夢だからか。

俺は勝手に納得することにした。

「とりあえず元に戻るか。夢なんだし」

俺は自分が元の姿に戻るよう念じた。

さつきは鏡が出たのでこれでいけると思った。

「ん・・・」

足元はスースーしたまま。

つまりまだスカート穿きつ放し。

未だ寂しい股間の感覚「戻ってない。」

「何でだよ」

「何で元に戻らないんだよー」

半分諦め気味の俺。

「元！？それが最も本質に近い姿のハズだ」

「！？」

どこからか男の声がする。

低い・・・ってか渋い。

「誰だ！？ってかどこだ！？」

俺は辺りを見回した。

誰もいない・・・。

「ココだ」

下から声がする。

「・・・」

俺は下を見て絶句した。

人・・・か？

小さな男が俺を見上げている。

渋いおっさんの顔。

体つきは良さそうだが小さいからよくわからない。

そしてコートを着ている。

「お前か・・・？さっき話しかけたのは」

「他に誰がいると言うのだ」

「誰だよお前」

「私か？私の名はベルゼブ。お前のパートナーだ」

「ぱーとなー？」

意味がわからない。

いや、パートナーという言葉の意味がわからないんじゃないんじやなくて・・・

「何だ貴様知らんのか？」

「知ってるわけがないだろミニナムおっさん」

「その様子だとこの世界についても知らぬようだな」

「夢だろ？」

俺はミニナムおっさん（ベルゼブ）を鼻で笑った。

俺の妄想の産物のくせに生意気だぞ。

「ふむ。知っている方が珍しいかも知れんな」

「まず。この世界はお前の夢ではない」

「は？」

多分今俺すつごい間抜けな顔してた。

「ココは夢幻世界むげんせかいと呼ばれる世界」

「お前の住んでいる現実世界と平行して存在するもう一つの世界」

あーハイハイ異世界ね。

夢にしちゃ設定のクオリティ高いじゃん。

「もとより夢とは現実世界から一時的に魂が離れ、夢幻世界に来てしまふ現象のことだ」

おお、なんかいいじゃん。

流石夢。

「元々夢幻世界でココが夢幻世界だと気づくことは稀にしかない
じゃあ俺すげーじゃん。

「そしてこの世界では自分の魂の本質に最も近い姿となる」

じゃあ俺の魂本質美少女かよ。

悪くはないがそれはそれでどうかと思う。

「夢幻世界がどーのこーのってのはわかった」

「うむ」

「お前は何者なんだ？」

「さっきも言ったであろう。お前のパートナーのベルゼブだ」

もうわけがわからない。

夢幻世界？

パートナー？

どこのライトノベルの話だ？

この状況。

この姿。

そしてベルゼブの存在。

その全てが夢で片付けるには難しかった。

「ベルゼブ」

「何だ？」

「何で俺はココが夢幻世界だと気づけたんだ？」

「さあな。気づけてもすぐに現実世界に戻るケースが多いからな。これだけ滞在できるのには何か意味があるのだろう」

まあそりゃそうだろう。

「で、いつ帰れるよ？」

「知らぬ」

「知つとけよ」

「知らぬものは知らぬ」

役に立つんだか立たないんだか・・・

「ハア・・・」

俺がため息をついた時だった。

「ユメ・・・」

「は？何か言ったかベルゼブ」

「何も言っていないぞ」

「ユメ・・・」

幼い少女の声がどこからか聞こえる。

「そーだよなー！お前みたいなおっさんがこんなかわいい声のハズないもんなー！」

「アイニキテ・・・」

「誰に？どこへ？ハッキリ喋らんかいッ！」

「ワタシノセカイ」

今まで白いだけだった世界が変動し始める。

「な、何だ！？」

「む！？」

ベルゼブは俺の脚を上って肩に乗った。

「何乗ってんだよ」

「パートナーだからな」

「勝手にしろ」

気がつけば世界は変わっていた。

小さな女の子の部屋のようだった。

クマのぬいぐるみ等のファンシーグッズがところせましと並べられている。

「ねえ、遊ぼう？」

「ッ！？」

突然、背後に気配がした。

「お姉ちゃん。来てくれてありがとう」

「誰だ・・・？」

「私は由愛。この夢幻世界をし・・・し・・・えーと・・・」

由愛は言葉に詰まって考え込む。

「支配？」

「そう！しはい！この夢幻世界をしはいしてます！」

嬉しげに大変なことをカミングアウトすんな。

「支配だ！？この夢幻世界には支配する者などいない」

肩でベルゼブが喋っている。

「でもおじさん。残念だけど私がいしてるの。ホントだよ？」

「たわけが。貴様のような小娘にこの夢幻世界を支配するほどの力があるわけがなかるう」

「ふーん。信じないんだ」

そついうと由愛は表情を一転させた。

「むッ！？」

「どうしたベルゼブ？」

ベルゼブの様子がおかしい。

「私の・・・私の体が・・・！」

「な！？」

ベルゼブの体が足元から消えていく。

「あはははッ！おじさん消えちゃえば？」

由愛は嬉しそうに笑って・・・っておい！

笑ってる場合か！

「貴様か小娘・・・ッ！」

「小娘じゃなくて由愛。おじさんこのままじゃ消えちゃうよ?」
「く・・・ッ！」

ベルゼブの体はもうほとんど消えている。

そして首まで消えた時だった。

「なーんちゃって♪」

由愛がそう言った瞬間、ベルゼブの体が元に戻った。

「・・・！」

「そういえばお姉ちゃんさあ。現実世界に帰りたい？」

「あ、ああ」

由愛はニコリと笑った。

「じゃあさ。ゲーむしよう？」

「ゲーム・・・？」

「簡単だよ。お姉ちゃんが私を見つければお姉ちゃんの勝ち。見つ
けられずにお姉ちゃんが死んだら・・・」

生死を伴うのかよ。

「現実世界と夢幻世界をゆ・・・ゆ・・・」

「融合か？」

「そ、そう！ゆうごう！」

「ゆうごうさせちゃうからね！」

ホントに意味わかってんのかこの子。

「じゃあ、ゲームスタート！」

パチン！

由愛が指をならした。

続く

第三章「密林と謎の少女」

「なあベルゼブよ」

「なんだ？」

「どこだココ」

「知らぬ」

意外と無知だな我がパートナーよ。

由愛が指をならして、そこから先がよくわからない。
気がつけばココにいた。

青い空。

白い雲。

緑の樹。

つてか樹ばつかだなココ。

「森・・・か？」

「密林の方が適切だな」

密林・・・ねえ。

俺は腕を組んで考える。

違和感。

む、胸かッ！？

それまで状況がアレだったから気にしてなかったが今俺女だったんだ。

胸に手が伸びる。

触ってみたい・・・。

・・・。

ベルゼブが見てるからやめよう。

誤魔化すために俺は胸ポケットに手をつ突っ込んだ。

「ん？」

何かある。

俺はソレを取り出した。

「どうした？」

「学生証・・・？」

「そのようだな」

名前の欄には「美奈」とだけ書かれている。

「・・・みな？」

「その姿の名であろう」

「美奈・・・ねえ・・・」

俺そんな名前だっけ？

芸名みたいなもんだと思っておこつ。

ちなみに俺の名前は河合晃で間違いないよな。

「とりあえずお前のことは美奈と呼ばせてもらつ」

「了解」

この姿で晃とか河合とか呼ばれるのは嫌だから承諾せざるを得ないな。

「で、由愛は俺たちを密林に飛ばしてどうする気だったんだ？」

「さあな」

「ゲームとか言ってたが・・・何か関係あるのか・・・？」

「さあな」

そればつかじゃねえか。

ホント無知だな我がパートナーよ。

「お腹空いた」

「ココは密林だ。果物か何かがあるだろう」

「探しに行くか」

「そうだな」

とりあえず状況を整理。

まずココは夢幻世界と呼ばれる世界。

次にその夢幻世界を支配しているのが由愛という少女。

そしてココは密林。

やっぱわけわかんねえ。

「美奈。アレはどうだ？」

ベルゼブが指差した方向には赤い果実が樹からぶら下がっていた。
りんごのようだが巨大な苺にも見える。

結局なんだかよくわからないが食べられそうだな。

「んじゃ、一つもらうとするか」

俺は果実に手を伸ばした。

甘い匂いがする。

ガブッ！

「がぶ？」

「ベルゼブ、何か噛んだか？」

「いや。それより美奈。手が赤いぞ」

「果実の汁じゃね？」

「にしては鉄分を含んでいる気がするが？」

何で液体の成分がわかったよ。

まあ。

血だもんね。

見りゃわかるよね。

「噛むッ！この果実噛むッ！何コレ！？噛むッ！」

勢いあまって三回も噛むと言ってしまった。

「落ち着け美奈。死にはせん」

「手がなくなるって！手が！俺の手！」

ブンブンと俺は手を振り回す。

ガン！

俺は噛まれたまま果実を樹にぶつけた。

果実はつぶれて俺の手は無事だった。

血は出てるけど……。

「ベルゼブ……」

「なんだ？」

「食欲なくなつた」

「だらうな」

「由愛の奴……。果実で俺を奇襲しようとは……」

「それは違うぞ美奈」

「ん？」

「夢の世界とは元々個人の想像が寄り集まってできた世界だ。その果実も密林も誰かの想像の産物だろう」

妙に納得できる。

それにしても由愛は一体俺に何をさせる気なんだろうか……。

ピチャ……

「ベルゼブ」

「何だ？」

「何か水の落ちる音しなかったか？」

「したな」

「1、雨が降り出した。2、化け物のよだれ……。どっちだと思
う？」

「無論2だ」

「そうだな。だって後ろで唸ってるもんな」
グルルルル……！

「次の選択だ」

「うむ」

「1、クマ。2、謎の怪物」

「無論……」

バツ！

俺は後ろを振り返った。

「2だな」

巨大な花だった。

しかし花と呼ぶには少し無理がある。

鮮やかな花びら。

長い触手。

そして、口。

「何でココの植物全員口があるんだよッ！」
ヒュッ！

触手が俺を捕まえようと伸びてくる。

俺は咄嗟にソレを避けた。

「危ねッ！」

「ベルゼブ！逃げるぞ！」

「うむ！」

「走るから落ちんなよ！」

俺は肩に乗っているベルゼブに落ちないように注意した後すぐに走りだした。

ガッ！

「！？」

樹の根が・・・。

足に引っかかった・・・！

無論こける俺。

「痛！」

シユルルルルッ！

足に触手が絡みつく。

「ちょッ！ベルゼブッ！ヤバいッ！」

「美奈ッ！」

「おわわわわわわッ！」

怪植物は俺をそのまま持ち上げる。

宙吊りで・・・！

「わー！馬鹿馬鹿ッ！こんな服着てるのに宙吊りにされたら・・・ッ！」

ス、スカートがアーーッ！！

俺のスカートなんて考えると死にたくなるけど今はそれどころではない。

「む！？」

ベルゼブは肩から落ちていく。

もうちょいでめくれる・・・じゃなくて喰われるッ！

そう思った時だった。

ザクッ！

触手の千切れる音がする。

「え・・・？」

そのまま地面に落ちる俺。

ドシンッ！

「いたた・・・」

俺の落ちたところにはちょうどベルゼブもいた。

良かった、つぶさなくて。

「さ、今のうちに逃げよ！」

いや、誰だよお前。

俺でも、無論ベルゼブのものでもない少女の音がする。

俺はとりあえず立ち上がってベルゼブを肩に乗せた。

「さ、行こ」

「うわッ！」

俺は謎の少女に手を引かれ、密林を駆け抜けた。

続く

第四章「要」

ここから消えたい

くだらない世界

つまらない世界

ここから消えたい

死にたくなるような同じことの繰り返し

世界は変わらない

それなら私が変わろう

くだらない、つまらない世界から抜けるために

この私が変わろう

要

「ちよ、どこまで走るんだよッ!」

俺は謎の少女に手を引かれ、必死にペースを合わせて走る。

「変な植物のいないところまで!」

一応納得。

ベルゼブは一所懸命に俺の肩を掴んでいる。

落ちるなよ我がパートナー!

「このへんでいいかな・・・」

ピタリと少女が止まった。

巨大な樹。

これまでにこの密林で見た樹の中でも一番巨大だろう。

その樹の周りには細かい草しか生えていない。

まるでその樹を避けるかのように他の樹は離れた場所に生えている。

「この樹・・・大丈夫なのか?」

「一応ね。あたしが最初にいた場所だから大丈夫」

最初に?

妙なことを言うなこの少女。

恐らくこの少女も俺、及び世界のみなさんの妄想の産物だと思うんだが・・・。

「それにしても困ったなあ。こんな密林であたしが何をやればいいのよ」

・・・!?

「おい、ベルゼブ」

俺は少女に聞こえない程度の小声でベルゼブに話しかけた。

「む?」

「あの娘・・・俺と同じじゃないか?」

「状況がか?」

「ああ」

「何話してんの？」

「うわッ！」

突然少女に話しかけられた俺は驚いて声を上げてしまった。

「もしかしてあなたも突然夢幻世界に来ちゃった人？」

「ま、まあ・・・」

「やっぱり！あたしそんな気がしてたんだよねー！」
無駄に元気だな。

「名前なんていうの？」

「え、えつと・・・。美奈」

「美奈・・・か。良い名前だね」

初めて名前を褒められた・・・。

もちろん現実世界で自己紹介した時も含めて。

初めて褒められたよ・・・。

「あたしは要^{かなめ}。呼び捨てでいいよ」

要と名乗る少女はニコリと笑った。

服装は俺とは違ってセーラー服。

そしてまた俺とは違って短めの髪。

身長は今の俺と同じくらいだろうか・・・。

顔は綺麗というよりかわいいといった感じだろうか。

顔だけでも活発そうなイメージがある。

「由愛って子のこと、何か知らないか？」

「あたしも会ったけどよく知らない・・・」

「ゲームっていつてたけど何をすれば良いんだ・・・？」

「それはあたしもわからないけど・・・」

「なんとかして由愛に会わないとな」

「そうだね。もしかしたら由愛ちゃんを探し出すっていうゲームじゃないかな？」

一理ある。

確かにそれならこの状況にも多少説明がつく。

「要」

誰かの声が聞こえる。

「ミント、何かわかった？」

「この近くに洞窟があるよ」

「洞窟かぁ・・・」

気づけば要の周りを妖精的な何かが飛んでいる。

ティンカーベルみたいな奴だ。

「む」

「どうしたベルゼブ」

「パートナーのようだな」

「あの妖精みたいのがか？」

「ああ」

「あ、紹介してなかったね。この子はミント。あたしのパートナーと、要は妖精的な何かを指差す。

我が渋いパートナーベルゼブと違ってかわいらしいなおい。少しだけうらやましい。

「俺も紹介してなかったな。コイツはベルゼブ」

俺は肩に乗っているベルゼブを指差した。

「よろしくね。ベルゼブさん」

「う、うむ・・・」

ベルゼブは要に話しかけられ、少し赤くなっている。つて何でだよ！

俺の時は普通じゃん！

肩にまで乗ってるくせに！

まあ別にどうでもいいか・・・。

「ミントが言うにはこの近くに洞窟があるらしいからそこに行ってみない？」

「何で？」

「冒険したいじゃん」

そこは何かあるかもしれないと答えて欲しかった。

それじゃまるであんま目的がないみたいじゃねえか。

要の無駄な陽気さに少し不安を覚えながらも俺達は洞窟へ向かうことになった・・・。

続く

第五章「戦う力」

歩くこと数十分。

到着。

いかにもRPGの最初のダンジョンみたいな雰囲気をかもし出している洞窟の前に俺達は来ていた。

「なんというか……。ダンジョンって感じたな」

「そうだね。何かあるかもしれないし……。中、入ろう？」

「そうだな」

要を先頭に俺達は洞窟の中へ入っていった。

薄暗い。

火でもあれば助かるのだが……。

「要、何か火はないか？」

ないとはわかっていてもとりあえず聞いてみる。

「ん……。火はないね。ミント、何かできる？」

「一応光ることができるけど……」

「じゃ、光って」

あたり全体が明るくなったわけではないがマシになった。

「ありがとな、ミント」

「か、要に頼まれたから光ってるだけなんだからね！勘違いしないでッ！」

勘違いなんかしてないつもりなんだが……？

ミントのおかげで洞窟の中が見渡せるようになってはきた。

目が慣れたせいもあるだろう。

ふと足元を見ると頭蓋骨等が落ちている。

妙に不気味だ。

「この骨……。この洞窟に入った人達の物かな……？」

要が少し怯えた様子で言う。

まあそう考えるのが妥当だろう。

「美奈」

「ん？」

「何かいるぞ」

ベルゼブが真面目な顔で言う。

「何かって・・・何？」

「何かだ」

会話になってないような気もする。

いきなり意味不明な世界に来てしかも何故か女になった俺ならちよつとしたことじゃ驚かないぞ。

もう十分驚いたからな。

ドシン・・・！

「足音が聞こえるぞ」

「きつとクマさんだよ」

頭大丈夫か要。

「ベルゼブ」

「む？」

「お前の言う何かってアレか？」

洞窟の奥から巨大な何かが歩いてくる。

「まあな」

嬉しげに答えんじゃねえ。

「わあ、おつきなクマさん」

要、ホントに大丈夫か？

「要」

「何？」

「棍棒持ったクマさんって見たことあるか？」

「ないよ」

「じゃあ何でお前言うクマさんは棍棒握ってたんだ？」

「きつとアレで蜂の巣をつついて蜂蜜を食べてたんだよ」
「どの。ーさんだ。」

巨大なクマ？はどんどんこちらに近づいてくる。

もうすっかりとその姿を確認できる。

わかってはいたがクマじゃない。

「要、蜂の巣つついてた棍棒に血がついてるのはなんでだ？」

「蜂の・・・血？」

蜂の体液は赤くなかったハズだぞ要。

「トロールだな」

「トロールだね」

そのパートナー二人、勝手に納得すんな。

緑色の肌。

毛のない頭。

アメリカの太った中年男性のようにでっぷりした腹。

右手に握られた蜂の体液（と要は思っている）のついた棍棒。

殺意ギンギンの目つき。

マンガや映画でしか見たことなかったが・・・。

トロールって奴らしい。

「うおおおおおッ！」

トロールは唸ると棍棒を振り上げた。

「ちょ・・・ッ！」

ドスン！

この洞窟、奥に行けば行くほど横幅が広がっている。

おかげで横に避けることができた。

「すごいよ美奈ちゃん！トロールだよ！」

クマさんはどうした。

「ベルゼブ。どうすりゃいいんだ！？」

「戦う他なかるう」

逃げるんじゃないくて？

「要、戦えるか？」

「もちろん！」

いつのまにか要の手には大剣が握られていた。

トロールはまたも棍棒を振り上げる。

「やあッ！」

振り下ろされた棍棒を大剣で防ぐ要。

グググググ・・・！

「うおおおおッ！」

「力・・・強いよコイツ・・・！」

当たり前っっちゃ当たり前。

「おいベルゼブ俺にも何か出せないのか？」

「知らん」

またそれが。

もう帰れよお前。

「冗談だ」

タイミング考えて言えよ冗談は。

「ココは夢幻世界だ。イメージが武器となる」

「イメージするのだ美奈。お前にとっての力を」

イメージ・・・ねえ。

少し考える。

「も、もう無理・・・かもッ！」

「うおおおおおおおッ！！！」

トロールは棍棒を振りなおした。

ガアンッ！

「きゃッ！」

あまりの力に要の手から大剣が離れる。

「うおおおおおおああッ！」

トロールはもう一度棍棒を振り上げた。

「ヤバッ！」

ザンッ！

「うお！？」

半分になる棍棒。

上半分が要の隣に落ちた。

「ふむ。中々の切れ味だな美奈」

「だろ？」

俺の手に握られているのは刀。

時代劇等でよくみるあの日本刀だ。

「行くぞ・・・ッ！」

俺は日本刀を構えなおした。

ザクッ！

俺はトロールの腹に日本刀を突き刺した。

流れる赤い体液。

日本刀をつたい、地面に滴り落ちる。

「うお・・・」

俺は勢いよく刀を腹から抜いた。

ドシィィィン・・・！

その場にトロールは音を立てて倒れた。

「よし」

「すごい！美奈ちゃん！」

もう必要ない、と感じた途端刀は消えた。

「あたしの剣にはないよそんな切れ味！」

妙に興奮してるな要。

「美奈、これからはその刀で戦うといい。この夢幻世界では戦うような状況になることは少くない」

「了解」

「じゃ、行こうよ」

「おう」

俺達はトロールの死体をまたいで先に進んだ。

続く

第六章「ツンデレとトラップ」

進めば進むほど幅の広がる洞窟。
もうかなり進んだつもりだ。

そろそろ中ボスとか出て欲しい頃である。

「ねえ美奈ちゃん。しりとりしよう？」

よくそんな悠長なことが言えるな。

「今そういう状況じゃないだろ」

呆れながら言う俺を要は不満そうな顔をしている。

「だって暇なんだもーん」

暇ってお前……。

確かにトロールを倒した後から一方通行。

歩くだけである。

「あ、あそこ！」

「ん？」

要が指差した方向には獅子の顔のついた扉。

目の部分には二つのくぼみがある。

そして扉以外には二つの道。

これだけでわかる。

どちらの道にも一つずつ玉があり、あの獅子の目にはめればいいのかろう。

そうすれば扉が開く……。

多分。

「ねえ美奈ちゃん。多分あのライオンの目を持って来ればいいんだよ」

「ああ」

「二手に分かれよう？」

「了解。行くぞベルゼブ」

「うむ」

俺はベルゼブが肩に乗っているのを確認すると右の道を行こうとした。

「ちょっと待って」

「ん？」

「このままじゃつまんないよ」

楽しさを求めるな。

「パートナー・・・交換しよ？」

理由を説明してくれ。

納得したら許可しよう。

「ミント、美奈ちゃんのところへ行って」

「な、なんで私が・・・!？」

「いいじゃん。ミント、美奈ちゃんのこと気に入ってるいたいだし」

「ち、違っわよッ！何言ってるんの要!」

「えー」

不満そうな要と顔を真っ赤にして否定するミント。

そんなに俺が嫌いかな？

「仕方ない……。ベルゼブ。要のここに行ってやれ」

「う、うむ・・・」

だから何で顔赤いんだよ。

キモチわりーな・・・。

「じゃああたしはベルゼブさんと左の道行くから美奈ちゃんはミントと右の道に行ってくれる？」

「わかった」

「じゃ、行こ？ベルゼブさん」

「う、うむ・・・」

要は俺の肩からベルゼブを自分の肩に移した。

「じゃあ、ミントをよろしくね」

そう言つと要は走って行った。

「・・・」

俺は隣で浮いているミントを見つめる。

「な、何よ・・・」

「いや、妖精って初めて見たからな・・・。俺のパートナーもベルゼブみたいなおっさんじゃなくてお前みたいなのが良かったな・・・」

「

「な、なな何言ってるのよ！私は要のパートナーよ！」

ゴッ！

小さいとはいえ、十分な威力でミントは俺の顔を蹴った。

「痛ッ！」

「ほら、さっさと行くわよ」

「お、おう・・・」

俺はミントを追いかけけるようにして先へ進んだ。

「ねえベルゼブさん」

「何だ？」

「暗いね」

「ミントがいないからな」

要は気づいていなかった。

ミントが今まで洞窟を照らしてくれていたから周りが明るかったことに・・・。

「どうする？」

「戻るしかないろう」

要は獅子の扉の場所まで戻ることにした。

それにしてもホントRPGの洞窟みたいだなココは・・・。
モンスターが少ないことを除けば。

「ねえ」

「ん？」

「美奈ってさ。何でそんな男みたいな喋り方なわけ？」

元々男だからです。

とは言えない。

「さ、さあな・・・」

「何か隠してるでしょ」

「隠してねーよ」

「教えなさいよ」

「何でだよ」

ドン！

ミントに突き飛ばされて壁に当たる。

ググ・・・！

壁はボタンみたいにへこんだ。

「・・・・・・・・・・は？」

「どうしたのよ？」

ガタン！

俺達の後ろに突然壁が現れた。

「トラップだ！」

「ええ！？何やってんのよ！」

「半分はお前のせいだろ！」

ドドドドドドドド・・・！！

「何か淹みたいな音しないか？」

「するわね・・・」

ドバアアアア！

「ッ！？」

激流。

俺達はそのまま流されていった。

「美奈。ちよつと美奈！」

誰かが俺の頬を叩いている。

「ん……。後五分」

まだ学校には早いだろ。

つてか美奈つて誰だ……。？

聞き覚えのある名前だが……

「美奈！美奈！何間抜けなこと言ってんのよ！」

美奈……

美奈……

「俺じゃんツ！」

一応思い出した。

「どこまで流されたんだ……。俺達」

「わからない。でも結構遠くのハズよ」

参ったな……。

「どうするミント」

「とりあえず進みましょう。何かあるかも」

同意。

俺達はとりあえず進むことにした。

要は迷っていた。

見えない。

とにかく見えない。

戻っているかどうかすらわからない。

「ベルゼブさん……」

「む？」

「あたし達つて……。迷子？」

「それが適切な表現かも知れぬな……」

とりあえず進んだ。

獅子の扉の前には一応火がある。

そこまでは行かなければどうにもならない。

俺達がしばらく進むと、台座があった。

ご丁寧に獅子の目玉であろう宝石が置いてある。

「なあ。コレ取ろうとしたらトラップ発動・・・しそつだよな？」

「そうね。足元とかトラップありそう」

「ミント、取ってきてくれ」

「別に良いけど・・・。要のためだからねッ！」

ミントは台座へとゆっくり近づいた。

そして宝石を両手で掴む。

「ちよつと重いけど・・・大丈夫」

台座から宝石が離れた。

ガコン！

「げ・・・」

トラップっぱい音。

「きゃッ！」

台座が地面に沈む・・・。

台座があつた部分に隙間ができる。

その隙間から何かが這い出て来た・・・。

「う・・・あ・・・！」

気持ちの悪い呻き声を上げるソレはまさしく・・・

「ゾンビ!？」

続く

第七章「謎の男」

「ちょっとなによこれ・・・」

ミントは怯えながら急いで俺のどこまで飛んできた。

「何かトラップばっかだな・・・」

「そうね・・・」

ざつと五、六匹程度だな。

少し念じれば俺の手には刀が握られていた。

「行くぜ」

俺はゾンビのうちの一匹を真つ二つに斬り裂いた。

激しい腐敗臭とドロドロした赤い体液。

俺は自分にかからないように避けた。

「ゾンビの返り血なんて飛ばさないでよ！」

「かかんないように避けとけよ」

俺が二匹目に斬りかかった時だった。

ガッ！

何かが俺の足を掴む。

「なッ！？」

さっきのゾンビだった。

右半身と左半身にわかれていているというのに右半身の腕が俺の足を掴んでいる。

「き、気持ち悪・・・！」

俺は慌てて刀を俺の足を掴んでいるゾンビの頭に刀を突き刺した。
クチャ！

骨まで腐敗しているらしく刀で簡単に貫くことが出来た。

脳をやられたそいつは俺の足から手を離れた。

「よし」

しかし、そうこうしている間に他のゾンビに囲まれてしまった。

「な・・・!!」

ゾンビ達が少しずつ近づいてくる。

臭い。

せめて一匹分だけでも開けば抜けられるんだが・・・

「このっ！」

ゴン！

ゾンビの頭に何か硬いものがぶつかる。

さっきの宝石だった。

「ミント！」

ゾンビ達の視線が一斉にミントに集まる。

今だ・・・！

俺はゾンビのうち一匹の首を刀で斬った。

そしてそのまま勢いで他のゾンビの首を斬った。

ボトボトボトボトッ！

ゾンビの首がまとめて地面に落ちる。

「う・・・あ・・・！？」

ゾンビ達の体はその場に倒れた。

首のあった部分から体液が流れている。

「よし、戻るぞミント」

「うん」

俺は落ちている宝石を拾って来た道に戻った。

要は迷っていた。

前回に引き続き。

「ちよつと・・・疲れた・・・」

要はその場に座り込んだ。

「うむ。少し休んだ方が良くかも知れぬな」

その時だった。

ザク

「・・・！？」

要の顔の横に細い剣が突き刺さる。

「だ、誰!?」

「おや、外してしまったか……。暗くてよく見えない」

男の声だった。

甘い声。

「要ッ!」

ベルゼブが叫ぶと同時に要はその場から立った。

「そう構えなくて良い。殺しに来ただけだから」

「誰……。!?」

「同じ質問をするのは……。あまり賢明ではない。一度目で答えなかった質問に……」

男は剣を壁から抜いた。

「二度目で答えるとも思つかッ!?」
ヒュッ!

風を切る音がして、男が剣を振り上げた。

「ッ!」

音で気づいた要は大剣を出現させ、ソレを防いだ。

ガァン!

「良い反応だ要」

「あたしの名前……。!」

「知っているわけではない。君の肩の男がそう呼んでいたからね・

・」

グググ……。!

要は男の剣を押し返そうと力を入れた。

「やぁッ!」

ガァン!

男の剣を弾き、要は男に蹴りを入れた。

正確には入れたつもりだった。

しかし要の足は空を蹴るだけだった。

「え……。!?」

いつの間にか耳元にかかる吐息。

「遅いな・・・」

男は要の隣にいた。

「さよなら」

ブン！

剣が要に振り下ろされる。

ザン！

要の肩から血が流れる。

幸い、斬られたのは左肩。

右肩に乗っていたベルゼブは無事だった。

「要！」

「だ、大丈夫・・・」

「殺し損ねたか・・・。じゃあ・・・」

「もう一度ッ！」

要は剣を避けた。

そして大剣を振り上げる。

「やああああッ！」

ズドオオオン！

地面が浅く砕ける。

やはりそこに男はおらず、背後には男の気配があった。

「美奈」

「何だ？」

突然深刻な顔をしてミントは話しかけてきた。

「嫌な予感がする」

「またトラップか？」

「違う。要に・・・何かあったのかも・・・」

「要に何かあったんならベルゼブにも何かあるハズだ・・・。俺は

何も感じないぞ？」

「アンタは鈍いからダメよ」

鈍いのか・・・？

俺って・・・。

「とにかく急ぎましょう」

「そうだな」

流石に少し、俺も嫌な予感がした。

さっきまでゆっくり歩いていたが、自然と小走りになる。

ベルゼブはともかく要が心配だ。

「美奈、アレ！」

ミントの指差す方向に二つの人影。

一人がもう一人の背後に立ち、剣を持っている。

背後の立たれている方の人影の肩にはもう一つの人影。

ミントの明かりだけが頼りだから遠くてよく見えない。

が、これだけはハッキリしている。

「要が危ねえッ！」

こっからじゃ間に合わない。

なら・・・！

俺の右手には刀が握られていた。

「ちよつと何する気！？」

「要の後ろの奴にコイツを突き刺すんだよ」

「無理よ！」

「こつみえても・・・」

俺は刀を紙飛行機のように持ち、後ろの奴に向けた。

「投擲とうてきには・・・」

「自信あるんだぜッ！」

ビュッ！

刀が飛ぶ。

要に剣が振り下ろされるコンマ一秒前。

ザクッ！

後ろの奴の肩に刀が突き刺さる。

「があッ！」

遠くからでも聞こえる声で後ろの奴がうめく。

「ヒヤヒヤさせないでよ！」

「結果オーライだ。行くぞ」

俺は要のところへ走って行った。

続く

第八章「オーガ」

「要！」

「美奈ちゃん！」

要が左肩を押さえながら走ってくる。

息も荒い。

「ベルゼブ。説明してくれ」

「私にもよくわからん。突然あの男が襲ってきたのだ」

俺が要の肩からベルゼブを自分の肩に移した。

ミントは「大丈夫！？」と要の方へ飛んでいった。

男が肩を押さえながら俺を睨みつける。

「貴様・・・！」

「何だよ？」

俺は男を睨み返した。

「タダで済むと思うな」

一瞬男の横で空気が動いた気がした。

「美奈！下がれ！」

ベルゼブが叫ぶ。

突然のことだったため、俺はすぐに下がった。

「出る。オーガ」

男がそう言うのと男の横に黒く、巨大な影が現れた。

その影は少しずつ色をつけていく。

影だった時ほどではないが黒い肌。

ボサボサに伸びた髪。

鋭く、赤く光る瞳。

その瞳には狂気が宿っているようだった。

太い腕。

太い足。

太いと言っても勿論贅肉ではなく筋肉。

腰の布以外は裸という露出狂まがいの格好。
そして握られた棍棒。

勿論トロールの持っていた物よりも大きい。

「要、ありゃクマさんの仲間か？」

「うっん。ライオンさん」

落ち着け要。

ライオンは直立しないぞ。

「オオオオオオオオオオオッ！」

「ライオンさん唸ってるぞ要。何か失礼なことしたのか？」

「きつと美奈ちゃんに唸ってるんだよ」

何故か納得した気分。

「やれ、オーガ・・・！」

ドン！

オーガと呼ばれた怪物が一步步歩くだけでこの音。

「やってらんねえよ・・・！」

俺は落ちていた刀を拾い上げ、構えた。

「来いよライオン。俺が相手だ・・・！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！」

さつきより余計に唸ってません？

トロールの時は刀で棍棒を斬れたが今回はそうは行くまい。

避け中心だな・・・。

さあ、来い！

俺は左に避けるつもりだった。

「オオオオッ！」

ブン！

だが奴が振ったのは・・・

「横振りかよ・・・」

間一髪しゃがんで避けた。

後、0.5秒遅かったら死んでた・・・。

とりあえずこちらから攻撃しないと話にならない。

俺は奴に斬りかかった。

刹那。

ドゴォッ！

「かは・・・ッ！」

見事なまでの威力の蹴りだった。

口から血が出たのがわかる。

内臓の一部が吹っ飛んだような感触。

ヤバイ・・・死ぬ・・・。

「美奈ちゃんッ！」

「美奈ッ！」

ベルゼブの声が下から聞こえる。

落ちたのかお前。

そんなことよりもヤバイ。

意識が薄れる。

死に・・・そう・・・

「・・・っ」

声が聞こえる。

小さな声。

今にも消えそうな声。

「・・・っ」

最初が聞こえない。

大きな声で頼む。

「こ・・・」

「・・・晃」

ああ、そうか。

俺の名前。

俺の……名前？

晃……？

美奈……？

呼んでいるのは誰だ……？

「……晃」

「……美奈」

「美奈ちゃん……！」

え……？

目を開けた俺の視界に入ってきたのは心配そうな表情の要とミント、そしてベルゼブだった。

「要……？」

「……うッ！」

起き上がるうとすると体に激痛が走る。

「無理しないで、まだ治りかけなんだから……」

要が倒れそうな俺を支える。

段々と状況がわかってきた。

洞窟。

謎の男……。

「そっだッ！アイツは……！？」

俺はキョロキョロと辺りを見回した。

男も、化け物もない。

「……状況を説明してくれ」

「アイツ、美奈ちゃんを殺したと思ってどこかへ行ってしまったの……」

「目的は・・・わからなかったのか？」

「うん・・・」

要がうつむく。

「ベルゼブ、あの化け物は何なんだ？」

「恐らく奴のパートナーだろう」

「嘘はやめとけ」

「嘘ではない。奴は私と同じ感じがした。それに、パートナー以外では説明がつかん」

確かに。

俺はゆつくりと起き上がった。

「そういえばなんで治ってるんだ？」

「それは、ミントが」

俺はミントの方を見た。

「要に頼まれただけなんだから！」

何故キレる。

「まあ、ありがとな」

俺は軽く礼を言っと、スカートについた泥を払った。

何か・・・慣れた。

この格好も体も。

「それとね、アイツ、コレを落としていったよ」

要が持っていたのはもう片方であろう宝石だった。

「何でアイツがそんなもん持ってたんだ？」

「さあ・・・？」

都合が良すぎるのが気になる。

落としていったのではなくあえて落としたのでは・・・？
とも考えたがとりあえず今はどうでもいい。

「ミント、獅子の目にさっきの宝石を入れてくれ」

「うん」

ミントは獅子の右目に宝石を入れた。

「じゃ、こっちはあたしが・・・」

続いて要ももう片方を入れる。

ガコン・・・

何かが外れる音がして、扉が開く。

「・・・!？」

扉の向こう。

小さな人影。

「お疲れ様。お姉ちゃん」

続く

第九章「由愛の目的」

「由愛・・・！」

俺の目の前にいるのは紛れもなく由愛。

俺をこの世界に呼び寄せた（と思われる）少女。

「何でココに・・・」

「頑張ったお姉ちゃん達に会いに来たの」

屈託のない笑顔。

「丁度良い。俺もお前に聞きたいことが山ほどある」

「良いよ。教えてあげても」

由愛は意外とあっさり答えた。

「・・・え？」

「何？聞きたくないの？」

「いや・・・」

あまりにあっさりし過ぎている。

俺は呆気にとられてしまった。

「もっとこう・・・条件とかあるんじゃないのか？」

「ううん。ないよ。欲しいの？」

「いや、いらないが・・・」

後ろを見れば要までもが呆けている・・・。

ってコイツはいつも呆けてるようなもんか。

「では私から質問させてもらおう」

俺の肩から聞こえる野太い声。

「何故貴様が支配している？」

「簡単な話だよおじさん。私のそれだけの力があってこの世界がそれを認めた」

由愛は特に表情を変えるでもなく、淡々と話した。

「私でもわかる簡単な理屈だよおじさん」

流石のベルゼブも黙っている。

「これだけ？」

「いや、俺が聞きたいのはそんなことじゃないんだ」
そう。

俺が聞きたいのはそんなことじゃない。

ぶつちやけ夢幻世界がどうのこうのなんて俺にはどうでも良い。

どこを誰が支配しようとか俺の知ったことじゃない。

自己中心のかもしれないが今の俺の素直な意見だ。

俺が聞きたいのはただ一つ。

「いつ元の世界に帰してくれるんだ？」

「だから、ゲーむで勝てば良いんだよ」

「そのゲームと言うのがわからない。勝利する方法も、ルールさえわからないゲームにどう勝てと言うんだ」

「しょうがないなあ」

こっちの台詞だ。

「これはね。私を……。由愛を探すゲーむ」

「実はね、参加してる人はお姉ちゃんだけじゃないの」
要を見ればそれはわかる。

「何人もの人が参加してる。夢幻世界の中の様々な世界を廻って私を探すの」

「ココにいるじゃないか」

「ココにいる私は私じゃない。今私が喋っているのは本物の由愛の考えと同じだけどこの私はげ、げ……。げ……。」

「鬼太郎か？」

「そうじゃなくて……。げ……。」

「幻想か」

ベルゼブが答える。

「そう！げんそう！」

ゲが三つと言えば鬼太郎だろう。

という俺の考えは間違っていたようだ。

「とにかく、今の私はげんそうなの。本物じゃない」

「だから、本物を探し出せば良いんだよ？」

「様々な世界って言ったよな？ 夢幻世界には幾つもの世界があるの？」

「そうだよ。色んな人たちのイメージが集まってこの世界は出来るの。でも全部のイメージは一つの世界には収まらないから小さな世界がいっぱいあるってことなの」

この娘は馬鹿なのか賢いのかわからない。

「簡単でしょ？」

突飛なところを除けばな。

「世界には絶対に一つは他の世界に移動する方法があるからそれを使って私を探してね」

一応理解。

しかし良く出来た話だ。

まるでテレビゲーム。

セーブとコンティニューは出来ないけどな。

「それと最後に一つ」

「何？」

「目的は何だ？」

「もくてき？」

「暇つぶしだよ。私が・・・」

「私がこの世界を現実にするまでの」

「！？」

この世界を現実にな・・・。

つつーことは元の世界が消えるってことか！？

「私の準備が整った時、夢は現となるわ」

無駄に難しい言葉知ってるな。

由愛の姿は薄れていく。

「おい！ 待て！」

「あ、一つ言い忘れてたけど。私を見つけたらこの世界で願いが一つ叶うんだよ。私の力で」

「だから、いずれ消える世界に戻るって願いはやめた方が良いでしょうちゃん」

かなりヤバいことをサラッと笑顔で言うのと由愛は消えた。

「マジか・・・」

俺はついさっきまで由愛がいた場所を見つめる。

「なんということだ・・・。奴にあのような目的があったとは・・・」

「夢幻世界の住人としてはたまらないわね・・・」

と、しばらく黙っていたミントが口を開く。

「何でだ？」

「バランスが崩れるのよ」

「バランス？」

「そう。この世界は元々現実世界の人たちのイメージで成り立っているのよ。この世界でも当然破壊は起こるし、寿命が来れば世界の一つくらい簡単に壊れるわ。でも、この世界で起こせるのは破壊だけ。建物や武器を作ることとは出来るけど、世界は作れない。創造の役目を持つ現実世界が消えるってことは創造と破壊のバランスが崩れちゃうのよ」

かなり長い説明どうもありがとう。

大体はわかった。

「つまり、由愛は止めなきゃいけないってことだな」

「そういうこと」

「こうなりややるしかないな要」

「え？あ、うん・・・」

ぎこちなく返事する要。

「どうした？」

「ううん。何でもない。頑張ろう！」

微妙に様子がおかしい気もするがまあいい。

呆けてただけだろう。

「んじゃ早く他の世界に移動しないとな」

「そうだね」

「美奈」

「ん？」

ベルゼブは俺の右を指差した。

機械のようなものが置いてある。

二人くらいは入れるかな。

「あの中に入れば良さそうだな」

「うん」

ゲームみたいに都合の良い移動方法。

例えばこれが本当にゲームだとしても。

俺達はそのゲームの中のキャラクターでしかなくても。

「今はココが俺のいる世界だ」

「え？」

進むしかない。

「どうしたの？」

「なんでもない。行くぞ」

「うん」

俺の考えは、夢幻世界に来たばかりの時とは大幅に変わっていたよ
うだ。

今自覚した。

続く

第十章「砂漠とポーカー」

昔の夢

遠い記憶

忘れたくない記憶

忘れない記憶

忘れてしまった記憶

思い出せない

思い出すことが出来ない

だから夢で問う

あなたは誰？

美奈

「ん・・・」

暗かった視界が明るくなっていく。

青い空。

白い雲。

あれ？

前も似たような場所・・・

「美奈ちゃん！砂漠だよー！」

前言撤回。

前は密林。

ココは・・・

「砂漠・・・？」

「うむ。目が覚めたか美奈」

「ベルゼブ・・・」

ベルゼブは倒れている俺の顔の横に立っていた。

「よいしょっと・・・」

俺は服についた砂を払いながら立ち上がった。

「ふう・・・」

要は楽しいに砂で遊んでいる。

子供かお前は。

「美奈ちゃん！砂！砂ー！」

要は嬉しそうに砂をこっちに投げてくる。

そういうのは雪でやってくれ。

「砂合戦しよー！」

だからそういうのは雪でやってくれ。

「それっ！」

だからそういうのは雪で・・・

「うわッ！」

「へへー」

「へーじゃないッ！目に入る！髪にかかる！」

ただでさえ無駄に長い髪だ。

ついた砂を洗って落とそうものなら面倒なことこの上ないだろう。
ブンブンブン！

俺は犬のごとく頭を振った。

長い髪がうっとおしい程顔にかかる。

「ほらほらー！」

要はまだ砂を投げてくる。

「だからやめろって！」

そして俺は再び頭を振る。

何で髪にかけてくるんだコイツは。
ブンブンブン！

「蜂が飛ぶー」

「叩くぞお前」

その後俺は俺の髪と同じくらい長い説教を要にし、反発するミントを鎮圧してこれからどうするか話し合った。

「美奈ちゃん。砂で遊んじゃダメ？」

「俺は同じ説明をするのは嫌いなんだ」

俺がそう言つと要はションボリとうなだれた。

「で、これからどうするよ？」

「砂で遊べば・・・」

と言いかけた要を俺は軽く睨んだ。

「良いとは思わないなあ・・・あたし」

「うむ。これ以上美奈の機嫌を損ねんでくれ。私としてもやりづらい」

気づけば俺はずっと髪の毛をいじってた。

砂がついているかどうかが気になって仕方がない。

今まで気にしていなかったがかなり長い。

一旦気にしだすともう止まらない。

砂がついていようとなかろうと髪の毛が気になって気になって仕方

がない。

「あゝあゝあゝッ！うざいッ！」

俺はまた頭を振った。

そつえば暑い。

一つ気になると余計なことまで気になり始める。

汗と砂と長さのせいで髪がうざい。

「要」

「はいッ！」

さつき俺に軽く睨まれたせいか要は少し怯えた様子だった。

「何か髪結ぶもの持っていないか？」

要はポケットの中を探したがすぐに

「ごめん。持っていない」

と答えた。

「この近くに町や集落がないか探した方が良いんじゃない？」

「それもそうだな。紐とかゴムとかくらいあるだろ」

「うむ。決まりだな」

そして俺達は歩きだした。

歩くこと数十分。

どこを見渡しても砂。

砂。

砂ッ！

「砂ッ！」

「ごめんなさいッ！」

反射的に要が謝る。

「何でお前が謝るんだよ？」

「あ、いや……。何でだろ……」

要はそつ言つて苦笑した。

「美奈、何をイライラしている」

「別に」

俺はそつけなく答えるとひたすら歩いた。

「暑いいいいいい．．．．．」

「美奈．．．ちよつと落ち着いたら？」

「暑くて死ぬううう．．．．．」

「まだ死ぬような暑さではないぞ美奈」

「天国でトロールが手を振ってる．．．。殺しちゃってごめんな．．

．．」

「ダメだわコイツ。早くなんとかしないと．．．」

「同意権だな」

パートナー二人につつまれまくりながらもひたすら歩く。

更に歩くこと数十分。

「あ、あれ！」

突然要が叫ぶ。

「んあ？」

要は前方を指差している。

見てみるとそれは町だった。

ココからではまだ遠いが．．．。

「町だッ！」

「町だねッ！」

俺は要とともに走りだした。

肩にベルゼブが必死でつかまっているのがわかる。

だがどうでもいい。

そんなことより水だ。

飲む水も欲しいが．．

洗う水。

汗だらけの体を洗いたくてたまらないのだ。

勿論髪も。

走り始めてから十分後。

入り口に到着。

「ハアハア．．．」

「っ、疲れたね美奈ちゃん．．．」

「そうだな・・・」

俺と要は息を切らしながら町の中に入った。

「風呂のある宿を教えてください」

「風呂があるもなにもこの町には宿は一軒しかないよ」

その宿は酒場兼宿屋のそうだ。

店の名前は「グリーンレッド」。

矛盾した名前にイラつときたが我慢する。

中に入るとマツチヨな男達が酒を楽しんでいる最中だった。

「一晩泊めてくれ」

「あいよ。4人で二千ゴールドだよ」

「ごーるど？」

「ココの通貨だよ」

勿論金など持っていない。

持っているハズがない。

「あの、ないんですけど・・・」

「それじゃダメだね」

「・・・」

さて、どうしたものか・・・。

「どうするんだ美奈」

「ん・・・」

俺は辺りを見回した。

「そうだな・・・」

俺はふと近くの男達を見た。

トランプ・・・。

ポーカーだな。

見たところ博打のようだ。

「おっさん」

「ああ？」

俺は背後から男に話しかけた。

「その博打・・・俺も混ぜてくれない？」

「嬢ちゃん。これは遊びじゃないんだよ」

「それは助かる。今早急に金が必要なんだ」

「いくらだい？」

「二千ゴールド」

男はそれを聞くと机の上を見た。

他の男達の賭けたゴールドが山積みにしてある。

「今ココにこいつらの賭けた金が三千ゴールドある。嬢ちゃん。一度やってみるかい？」

「勿論」

「いくら賭ける？」

「持つてない」

そう言うと男はムツとした。

「それじゃ負けたら何を払うつもりだ？身体で払うか・・・？」

男はニヤニヤしながら言う。

「いいぜ」

男が席を空けると俺はそこに座った。

「美奈ちゃん・・・大丈夫なの？」

「ああ」

男達がカードを配り始めた。

イカサマは・・・してないな。

見た感じ。

俺のところにもカードが置かれた。

俺はカード見てニヤリと心で笑った。

俺はカードを交換しなかった。

いや、する必要がなかった。

バン！

俺はカードを机にたたきつけた。

「ロイヤルストレートフラッシュだ」

続く

第十一章「搜索」

「ああ・・・生き返る・・・」

風呂・・・とは言っても水風呂だった。
近くのオアシスから汲んで来るらしい。

「気持ち良い・・・」

俺は水風呂の中に肩までつかっていた。

これまでの疲れが全て癒えるかのようにだった。

ポーカで馬鹿勝ちした俺はすぐに宿を借りた。

金もつたいないので俺と要で一部屋。

ベルゼブとミントは人数にカウントしていない。

「ふう・・・」

落ち着いたところでふと自分の身体を見てみた。

服を脱ぐ時はただ身体を洗い流したい一心で気にしていなかったが・
・・・。

ゴクリと俺はつばを飲んだ。

女の・・・身体・・・。

それも自分の・・・。

ベルゼブはいない。

要とミントは部屋で待つてる・・・。

自然と手は胸へと動いていった・・・。

バン！

「ッ！？」

ドアが勢いよく開けられる。

「美奈ちゃん！一緒に入ろっ！」

「か、要・・・！」

「背中流してあげるから出てきなよ」

「いや、もう・・・流した・・・から・・・」

流したことは流したが洗ってはない。

要の右手には石鹸が握られていた。

「ちゃんと洗わないと汚いよ？」

後で洗うつもりだったんだが……。

要は身体にバスタオルを巻いている。

そういえば俺巻くの忘れてたな。

「後で自分で洗うから……」

だからとりあえず今は出てくれ。

要の身体が気になって仕方がない。

まともな恋愛経験がない俺に女性と風呂に入れというのは無茶な話だ……。

ただでさえ自分の身体に戸惑ってるのに……。

「ん」

要は一瞬考えるような素振りを見せるとガシッと俺の腕を掴んだ。

「……え？」

「だーめ。ちゃんと洗うよ」

「ちょ、お前話聞いてたか!？」

「髪もちゃんと洗ってあげるから」

「自分で洗うって!」

「良いから良いから。汚れたのはあたしの責任だし」

こんなところで責任感じんな。

要は意外に力が強く、俺はすぐに引きずり出された。

「んじゃ行くよー」

「やーめーろー!」

「……ふう」

俺はタオルで身体と髪を念入りに拭くと服を着た。入る前に着ていた物と同じ物だ。

風呂に入っている間に洗われたらしく、まだ湿っている。
ってか洗うなら他の服も用意しろよ。
湿っていて少し気持ちが悪い。

「うわー湿ってるー」

要も同じ状態のようだ。

時間を見ると夜の十時。

部屋に戻るとベルゼブとミントが待っていた。

「うむ、落ち着いたか美奈」

「まあな」

ある意味疲れた気もしたが・・・。

俺はすぐにベッドの中に入った。

「美奈ちゃん。もう寝るの？」

「眠い」

夢の中で寝るってのもなんだかなあ・・・。

って夢じゃなかったんだっけ・・・？

どうでもいいや・・・。

俺は眠りについた。

「おーい」

誰だ・・・。

俺の眠りの邪魔をするのは・・・。

「そろそろ起きてー」

まだ学校には早いだろ。

学校・・・？

夢幻世界・・・。

ああ・・・。

「美奈ちゃん」

要か。

「・・・」

俺は身体を起こした。

まだ眠い。

「おはよー」

「おう」

「よく寝れた？」

「おう」

「今の気分は？」

「おう」

「血液型は？」

「おう」

「O型なんだね」

「B型だ」

「美奈ちゃんおもしろーい」

寝起きの俺で遊ぶな。

俺は頭をポリポリとかくとベッドから降りた。

「起きたか美奈」

「ベルゼブ」

相変わらず渋いのにちっさい。

「アンタ寝過ぎよ。何時だと思ってるの？」

ミントが時計を指差す。

まだ十時じゃねえか。

「全然寝過ぎじゃねえ。むしろ早い」

「どう考えても寝過ぎよ」

「まあいいか」

「よくないっ！」

顔面に蹴りを入れられた。

「痛えな・・・」

大分目が覚めてきた。

「美奈ちゃん。これからどうするの？」

「そうだな・・・。とりあえず由愛を探すのが先決だな」

「少しでも手がかりがあれば良いんだけどねー」

言われてみれば手がかりが何一つない。

このゲーム、多少俺達に不利なんじゃないか・・・？

「とりあえず町に出ないと始まらないな」

「そうだね」

「この世界の範囲も調べておかねばならぬな」

「世界の範囲？」

「うむ。夢幻世界に幾つか世界があるのは説明したな？」

「ああ」

「その幾つかの世界はお前達の現実世界のように無限ではない」
「あれって無限だったのか。」

「まあ宇宙は広大だからな。」

「世界の範囲は国一つ分のものから一部屋分のものまで様々だ」

「この世界はどのくらいだ？」

「まだわからんが町一つ分程度だろう」

「何かもう何でもアリだな。」

「めんどくさいから考えるのはやめよう。」

「とりあえず俺達は町に出ることにした。」

「最初は手分けして探そうかと思ったが前回の洞窟の一件もあり、同時に行動することにした。」

「前と違って人がいるんだから聞いてみればいいんじゃない？」

「私も要の意見に賛成だ」

「そうだな・・・」

「とは言ったものの」

「何て聞けば良いんだ？」

「え？そりゃあ小さな女の子見ませんでしたか？って」

「小さな女の子なんて世界中どこにでもいるぞ」

「そんなことないよ！少子高齢化社会なんだよ！？」

「あんま関係ねーぞソレ。」

「とにかく。それじゃ聞かれた方もわかんないだろ」

「そっかー」

「じゃあ、小さな女の子をかたっぱしから追いかけようよ」

「変質者だろそれ」

「じゃーどーすんのー」

そんなこと言われてもな・・・

「ねえ、不思議な力を持った女の子って言うのはどう？」

「あ、それいいねミント！」

「そりゃ名案だな」

確かにそれならいけそうだ。

「べ、別に名案って言われる程のことじゃないわよ・・・。それに
アンタに言われても嬉しくないんだからっ！」

「はいはい。とりあえずそれで聞いて回ろうぜ」

俺達は道行く人に片っ端から聞いてみた。

「あの、この町に不思議な力のある女の子いませんか？」

「不思議な力・・・？シーラ様のことかい？」

「シーラ様？」

「そう。ほら、あそこに見える塔があるだろ？あの天辺で毎日お祈りしてるのがシーラ様だよ」

「不思議な力つてのは？」

「予知・・・だね。シーラ様の予知に何度町が救われたことか・・・」

「

「どうする美奈ちゃん？」

「とりあえず・・・行ってみるか」

その人に案内してもらい、俺達はシーラ様とかいうのがいる塔に向かった。

続く

第十二章「幻術」

「シーラ様・・・ねえ」

俺はこの塔の頂上にいるであろう少女の名前を口にした。

少女というだけで由愛とはあまり関係ない気がするが・・・。
とりあえず行ってみるに越したことはない。

手がかり・・・とは言い難いが数少ない可能性の一つだしな。
とは言ってもシーラ様とやらが由愛本人だとはあまり思っていない。
何かを知っているかもしれない。

この世界について、由愛について・・・。

「行こっか？」

要が塔を指差す。

「ああ」

要を先頭に、俺達は中へ入っていった。

中は単純に螺旋階段。

これを頂上までひたすら上り続けるのか・・・？

「めんどくせえ」

自然にため息と愚痴がこぼれる。

「そんなこと言わずに頑張ろうよ」

要は笑顔でそういうと階段を上っていく・・・。
上り続けること数十分間。

所々にある窓から見える景色はかなり変わってきている。

「うわー！すごいねー！」

要は窓から身を乗り出していた。

「うわッ！馬鹿！危ないから戻って来い！」

「えー！何でー！美奈ちゃんこっち来なよ！結構キレイだよ！」

「もしかしてアンタ・・・高所恐怖症？よくここまで上ってこれたわねー」

ミントが茶化すように俺の顔の周りを飛び回る。

「うつせー！要、いいから戻って来い！」

要は納得いかなさそうな顔で戻ってきた。

「何で要まで止めんのよ？」

「他の奴が身を乗り出してるのも何か怖いんだよ」

「変なのー」

俺も思う。

俺の軽い高所恐怖症がバレてから更に上ること数十分。

一向に進んだ気はしない。

「ハアハア・・・」

流石に息切れし始めた。

「ねえ」

「ん？」

「何かおかしいよ・・・」

要が窓の外を見ながら真剣な面持ちで言う。

「何がだよ？」

「だってここから見える景色・・・」

「さっきと同じ」

「な・・・！？」

景色を見ていない俺にはわからないが要が嘘を吐くとは思えない。

「ベルゼブ！」

「うむ。第三者の力が加わっていると考えて間違いないな」

「ミント、確かめてきてくれないか？」

「え？」

「このまま進めばこの位置まで戻ってくるハズだ。確かめるために
行っ来てくれないか？」

「しょうがないわね・・・」

そいうとミントは進んでいった。

数分後。

「あれー！？」

ミントは下から上がってきた。

「やっぱりな」

「どういうこと？」

「俺達は何かの力でここから進めなくなってるんだ。進もうとすればこの位置まで戻される。延々と一定の場所を行ったり来たりする仕組みになってるんだ」

幻術か何か・・・か？

やっぱ何でもアリだなこの世界。

「どうするの・・・？」

不安そうな顔で要が言う。

「ベルゼブ、何か策はないか？」

「む・・・。この空間と我々に対して幻術が使われている。単純に幻術に使われている魔力を超えた魔力で破れば良い」

マンガみたいなことを真顔でペラペラと喋るこのミニマムダンディ。大体魔力なんて俺にあるわけないだろ。

「つつーか魔力ってなんだよ。んなマンガみたいな概念がこの世界でも通用するのか？」

「呼称はどうでも良いのだ。ただわかりやすく言って魔力。別に気でも霊力でもチャクラでも構わん」
なるほどな。

「ようは現実離れた力を使う時に使うエネルギーだな？」

「そういうことだ」

とは言ったものの・・・。

理解はできた。

しかし実行に移せない。

そもそも俺にできることつつたら刀出すくらいだ。

「ベルゼブ。刀出すくらいしかできねーぞ？」

「十分だ」

「要じゃダメなのか？」

「いや、お前が適任だ」

「了解」

少し念じれば刀はすぐに出現する。

「で、どうすんだ？」

「この空間を思い切り斬れ」

「わりと簡単なんだな・・・」

ブン！

俺は刀を思い切り振った。

ブチッ！

何かが千切れるような音がする。

テレビをつけたままコンセントを抜いた時のような音。

一瞬で視界が変わった。

螺旋階段の途中だったハズが、目の前には扉が出現した。

「よし、成功したみたいだな」

「やったー！」

「多分この奥がシーラ様とやらいる部屋だ」

「うん」

俺は静かに扉を開けた。

簡易な部屋だった。

少しの本棚とベッドと椅子と机。

ベッドは二つあった。

そして椅子に誰か座っている。

「よく破ったわね」

「誰だアナタ」

「あの幻術は私の術の中でもかなり高度なものよ」

「聞けよ人の話」

「ソレを破るってことはアナタかなりできるわね」

「いや、だから・・・」

「良いわ。相手してあげる」

「聞けって・・・」

「この私がおアナタより上だということを教えてあげるわ」

「聞けっっーのッ！」

「あら？」

女はやつと気づいたという様子で俺の方を見る。

「いたの？」

「なッ！？今俺に向かって喋ってたんじゃないのか！？」

「ああ、アレは侵入者が来たときの台詞練習よ」

何だコイツ・・・。

ウェーブのかかった長い髪。

露出度の高い服装。

中々キレイだけど性格は色々と問題ありそうだな・・・。

勘だけ。

「私の知らない顔の奴がココにいるってことは侵入者ね？」

「まあな」

侵入ってほどでもない気がするんだが・・・。

「よく破ったわね」

「は？」

「あの幻術は私の術の中でも・・・」

「それはさっき聞いた」

「そうだったわね」

話せば話すほど妙な奴だな。

「なら、言わなくてもわかるわね？」

俺は出しっぱなしだった刀を構えた。

「侵入者はこの塔から即退場してもらおうわ！」

続く

第十三章「シーラ」

肩にベルゼブが乗ったままでは戦いづらいので要に預けた。

「美奈ちゃん……」

「大丈夫だ……」

多分だけど。

女は俺の用意が出来たことを確認すると本棚に立てかけてあった大きめの槍を手に取り、構えた。

「さあ、来なさい！」

よく考えてみればコイツと戦う意味など微塵もない。
疲れるだけだ。

俺達はシーラ様とやらに会いに来ただけだ。

「待て、俺達はこの塔の……」

「来ないなら……」

「こっちから行かせてもらうわ！」

ビュッ！

俺に向かって槍が突き出される。

間一髪で避けることができたが……。

コイツホント話聞かぬーな。

「人の話を……」

俺は刀を振り上げる。

「聞けつつーのッ！」

俺は女に刀を思い切り振り下ろした。

ゴッ！

「かはッ！」

槍だった。

俺の右に突き出された槍を横に振ることによって俺の腹部へと直撃させたのだった。

ドゴッ！

そのまま壁までぶっ飛ばされた。

「糞・・・」

俺は痛む腹部を押さえながらも体勢を立て直した。

「だあッ！」

刀を構えて女に向かって突っ込む。

「美奈ッ！つつこむな！」

「え？」

ビュッ！

危なかった。

ベルゼブの声がなかったら奴の槍は俺の身体を貫通していたことだろう。

ブン！

「同じ手は喰らわねえよ」

振られた槍を飛んで避け、槍を踏み台にして女に上から斬りかかる。女はそれを避け、一旦後ろに引いた。

俺が着地したことを確認すると、女はもう一度槍で突っ込んできた。

「ああもうッ！危なっかしい！」

俺は槍を避けると槍に向かって刀を振り下ろす。

ザンッ！

以外にも槍はキレイに斬れた。

「な・・・ッ！？」

「武器も使い物にならなかったことだし、俺の話を・・・」

「よくもやってくれたわね・・・」

「・・・はい？」

「武器がないのなら魔術で戦うまでよ・・・」

ボッ！

女の右腕には炎が灯っていた。

「攻撃系の魔術は得意じゃないけど・・・これで戦うしかないわ！」

「だから待てっつーに！」

半分諦めつつも俺は刀を構えた。
その時だった。

「おやめなさいッ！」

「ッ!？」

奥の扉から少女が現れる。

「し、シーラ様・・・」

「どうせまた貴女の早とちりなのでしょう？その方の話をお聞きなさい！」

「しかし彼女は武器を・・・」

「貴女が敵意をむき出しにするからでしょう！」

「う・・・」

「それに塔にかけてある幻術もやめなさいと何度も言っているでしょう！」

「しかしあれは侵入者対策で・・・」

「なら夜中だけにしなさい！少なくとも昼間には危険な侵入者は来ません！」

あの分からず屋女を簡単に黙らせたあの少女こそシーラ様・・・なのだろう。

「あの・・・」

ふいに要が口を開く。

「あたし達は、シーラ様に会いに来ただけなんです・・・」

「やっぱりそれだけですよね。ほらみなさい！この方達には悪意はありません」

「どうぞ、奥へお入り下さい」

俺達はシーラ様に連れられて奥へ入っていった。
礼拝堂のようなところだった。

「で、私の用があるのでしょう？」

「ああ、その前に一つ」

「何でしょう？」

「予知ができるらしいが、それなら俺達が来るのもわかってたハズ

だよな？」

「いえ、未来は見ようとしなければ見えません」

「そうか」

ならさっきの件も納得だ。

「あと、さっきの女は・・・」

「彼女は私の側近のティラ。せつかちで容量は悪いですが、忠実で素直な方です」

「なるほどな」

「んじゃ本題に入るぞ」

「はい」

「単刀直入に言う。由愛って子を知らないか？」

俺の問いを聞いたシーラ様は少し驚いた表情をした。

「彼女を、見たことがあるんですね？」

「ああ」

俺が答えるとはほぼ同時に要がうなづく。

「先に言っておきますが、この世界に彼女はいません」

「・・・」

「ですが、見ることはできます」

「え？」

「この先、どの世界で会うことができるか・・・」

そう言うとシーラ様は目を閉じた。

「・・・」

「・・・」

「白」

「白？」

「白い世界」

最初のところか？

「全てが混ざり合う瞬間の世界」

全てが・・・混ざり合う・・・？

「向こうとこちらが繋がる瞬間」

「貴女方は彼女に会うでしょう」

向こうとこちら・・・。

「現実と、夢幻世界・・・」

ってちよつと待て！

「アイツが融合させるのは俺達が死んだ時だ。俺達が死なずに繋がるってのは重大なルール違反だ」

「どんなルールがあるか私は存じません。ですが、見えたことは真実です」

「・・・」

「ですが、貴女方の行動次第では変わることも十分あり得ます。そうやってこの世界は反映してきました」

「・・・。だよな」

「彼女が、由愛が現れてからこの夢幻世界は少しずつ変わってきている」

「貴女方のような向こうからの来訪者が増え、そして貴女方と同じように彼女を探している」

「俺達みたいな奴がいるのか？」

「少なくともこの話をしたのは二回目です」

「そうか・・・」

俺達だけじゃないってことか・・・。

「よし、そろそろ行くか、要」

「え、うん。どこに？」

「・・・」

どこにだろうな・・・。

「他の世界へ移動するのならこれをお使い下さい」

シーラ様は小さな鍵のようなものを俺に手渡した。

「無限に使えるわけではありませんが、世界を移動するための道具です」

「そうか、ありがとう」

「扉の鍵を開けるように回して使ってください」

俺は言われた通りに鍵を使った。

空間に白い扉のような穴が現れる。

「んじゃ、色々ありがとな」

「いえ、これも務めですから」

「健闘を祈ります」

シーラ様のその言葉を聞いたあと、俺達の中へと入っていった。

続く

第十四章「過去と疑念」

いつも一緒

いつまでも一緒

そう思ってたのは私だけ？

別れは突然

あまりにも唐突過ぎて

時間は残酷

どんなに大切なコトも忘れさせる

私のことも

美奈

「ん・・・」

視界はぼやけている。

授業中に寝てしまい、チャイムで起きたような感覚。

「美奈ちゃん。着いたよー」

要の声が聞こえる。

目を開くとそこは見覚えのある公園だった。

「どっかで見たような・・・」

「どしたの？」

要が俺の顔を覗き込む。

俺はとりあえず立ち上がると適当なベンチに座った。

「この公園、どこかで見た気がするんだ」

「ふーん」

「ってか元の世界じゃ毎日見てた気がする」

そうそう通学路で。

って

「ココ俺ん家の近くじゃん」

「え！？ホントに!？」

「ああ、ホントだ」

「ふむ。興味深いな」

俺はあたりを見渡した。

確かにココは俺が住んでいる団地の公園。

昔はココでよく遊んでたなあ・・・。

「ココでじっとしてても仕方ないし、どっか行かない？」

「それもそうだな」

ミントの提案でとりあえず公園を後にした。

とは言ってもどこに行くんだ・・・？

俺ん家か？

「美奈ちゃんの家とか行ってみたいなー」

「却下だ」

「えー」

「何が起こるかわかんないだろ」

勿論言い訳。

「確かに間違っではおらぬが・・・」

「何だよ？」

「私も興味がある」

ベルゼブもかよ。

俺ん家の近くとは言っても微妙に違う。

公園の前に家があったハズなのだが・・・。

空き地になっている。

所々空き地が増えてるな・・・。

「増えているというより・・・」

空き地に戻ってるって感じた。

元々空き地多かったしな。

ある時期を境に家が増えたんだが・・・。

ブブブブブブ・・・

妙な音が聞こえる。

虫が飛ぶような・・・そんな音だった。

「ねえ、アレ見て！」

要が指差したのは俺の頭上だった。

見上げるとこれまた妙な生物？が飛んでいる。

タコ。

凧ではなく、タコ。

海にいるヌメヌメしたアイツだ。

しかもその頭にはタコ。コプターがついている。

だから飛んでるのか！。

って何を納得してるんだ俺は。

「何だコイツ・・・」

俺の手に刀が握られる。

そして妙なタコに向かって構えた。

危険そうには見えないが・・・。

「美奈ちゃん、その子多分安全だよ？」

「俺もそんな気はするが・・・」

ミントがタコの足を引つ張る。

・・・。

タコはまったく気にしていない様子だった。

何か、間の抜けた顔だなコイツ。

リアルなタコじゃなくて、小学生の落書きみたいなタコだ。

そういえば俺も昔こんな落書きしたなあ・・・。

「安全だよ。コイツ」

ミントがそう言うなら大丈夫だろう。

俺は刀を収めた。

とうか消した。

どうもこの表現難しいな。

消したとうか収めたとうか・・・。

まあいいや。

「何かかわいいね」

「まあな」

自然と笑みがこぼれる。

「あ、笑った」

「それがどうしたよ？」

「何か美奈ちゃん、あんまり笑わないから」

そういえばこの世界に来てからは余裕がなくて笑うことも少なかったな・・・。

「笑うとかわいいんだから」

「なッ・・・！馬鹿！何言い出すんだよ！」

「ホントのことだもん」

「そう・・・なのか？」

「まあいつもの間抜け面も笑えるけどね」

「まあいつもの間抜け面も笑えるけどね」

「なんだとッ！」

茶化すミントを追いかける俺。

何かこういう時間、久々な気がする。

「んじゃそういうことで！美奈ちゃんの家へしゅっぱーっ！」

「「おー！」」

ベルゼブまで声合わせてんじゃねえ！

「ま、良いか・・・」

俺は家まで案内してやることにした。

ま、大した距離じゃないけどな。

「アレが美奈ちゃんの家？」

要が指差す方向には俺の家があった。

「ああ」

何か・・・今と違うぞ。

キレイというかなんというか・・・。

庭もちよつと違うな。

玄関の前まで来て見る。

ほぼ正面に家があったハズなんだが・・・。

空き地？

そしてその空き地で子供達が遊んでいる。

野球か。

昔そこでやったな・・・。

「あっ！」

子供達のうち一人が声をあげる。

ボールを落としたらしい。

ボールはこっちに転がってくる。

俺はボールを拾うと走ってくる子供に手渡そうとした。

「ほら」

「ありがとう！」

・・・え？

顔を見たとき驚いた。

「昔の・・・俺？」

「どうしたの？」

良く見れば他の子供達も見覚えがある。

「祐君、良太君・・・」

「お姉ちゃん？」

ふいに涙がこぼれる。

「何でもないよ」

「変なの」

「早くしろよ」

「うん！」

過去の俺は子供達に向かって走っていく。

涙が止まらない。

アレは昔の俺。

昔の俺達だ。

山品祐、森川良太。

昔の友達。

中学にあがるまではよく遊んでたんだが・・・。

一人は学年が違い、もう一人はクラスもクラブも違った。

完全に居場所が別れてしまった俺達はもう話もしなくなっていた。

その俺達が、今、ココで・・・。

こんなに楽しそうに・・・。

「お、おい」

「何？」

行こうとする過去の俺を呼び止める。

「アイツらのこと、好きか？」

「うん！」

「大事にしるよ・・・」

「当たり前だろ！」

過去の俺はそういつてはにかんだ。

また涙が溢れてくる。

「そつか・・・」

「美奈ちゃん？」

「この世界じゃ、これが当たり前だよな・・・」
懐かしかった。

これで全て納得した。

足りない家。

空き地。

ココは俺の世界の過去を映し出したようなものだ。
あの妙な生物は・・・。

小学生の頃に書いた落書きだな。

空き地を見れば野球を続けている四人の子供達。

女の子もいるな。

楽しそうだった。

俺も、昔はアイツらと・・・。

・・・。

四人？

待て。

俺は三人で遊んでいた気がする。

勿論俺を含めてだ。

計算が合わない。

おかしくないか？

それに女の子なんていなかったハズ・・・。

由愛じゃない。

由愛には見えない。

じゃあ一体・・・。

「美奈、ココには由愛はいないようだ」

「あ、ああ」

「行くぞ」

「ああ」

「えー。家はー」

「もう良いだろそれは」

そう言って俺はシーラ様にもらった鍵を使った。

そして白い扉の中へ入っていく。

一つの大きな疑念を残したまま・・・。

続く

第十五章「ライオンさんの最期」

・・・

目を開けたが何も見えない。

それとも目を開けたと錯覚しているだけで実は開けてないのか？
どちらにしても現状としては何も見えない。

「美奈ちゃん、どこー？」

要の声が聞こえる。

「何にも見えないよー」

見えないのは俺だけじゃないらしい。

ということは単純に暗いだけか・・・？

にしては目が慣れるのが遅い。

「ミント、いるー？」

「要？」

「照らしてー！」

「了解」

ふいに辺りが明るくなった。

要とミントが視界に入る。

「あ、美奈ちゃん」

「要」

「どこだろう・・・。」

「さあな」

「夢幻世界の中でもかなり辺鄙な世界に来たようだな」

「ベルゼブ、何かわかるか？」

「いや」

俺のパートナーはどこで役に立つんだ？

ミント然りオーガ然り、パートナーは何かしら特異な能力があるハズなんだが・・・。

このベルゼブだけは一度も特別なところを見せたことがない。

小さいだけか？

とりあえず辺りを見回してみる。

ミントの光のおかげで一応は見える。

「なんだこりゃ・・・」

墓石？

西洋風の墓。

「誰のだ・・・？」

M i n a

「あーミナって人ね。はいはい」

うん、どっかで聞いたことあるぞ。

「俺じゃん！？」

「どしたの美奈ちゃん？」

「何か俺の墓があるんだよ。きっと俺は死んだんだ」

「ホントに！？」

「夢幻世界は・・・死後の世界だったんだよ・・・」

「な、何だってー！？」

ペチン！

頬を軽くベルゼブに叩かれる。

「ふざけている場合か？」

「すまん、でも要も一緒にやってたぜ？」

「それは関係なからう」

正論っっちゃ正論だな。

「あ、美奈ちゃん！あたしのもあるよー！」

見ればその墓にはK a n a m eと書いてある。

「お前も死んだのか・・・」

「そうみたいだねー」

何で気楽なんだお前。

「冗談はさておき・・・」

「うむ」

「ベルゼブ、何かいるよな？」

「そうだな」

横でベルゼブがうなずく。

「アレ見て！」

ミントの指差す方向を見ればオーガがいた。

「出やがったな化け物野郎・・・」

「ライオンさん久しぶりー」

まだ言ってたのか・・・。

「要、ライオンさんは何でココにいるんだ？」

「きつと動物園なんだよココ」

暗すぎだぞココの動物園。

墓とか趣味悪いしな。

ライオンさんに食われた人の墓か？

いや、それだと俺はライオンさんに食われたことに・・・

ってめんどくせえ！

関係ないしな。

「オオオオオッ！」

「ライオンさんは敵意むき出しだぞ、要」

「こないだの続きだよ」

なるほどな。

「いるんだろ？」

俺がそう言つとオーガの後ろからあの男が現れた。

「来たな、美奈」

「来たくはなかったけどな」

パチン！

男が指をならすと辺りが少し明るくなる。

月が出たらしい。

まわりは墓石だらけだった。

趣味悪いなホント。

「ココは俺の世界だ。貴様らのために作ってやった墓は気に入ってくれたか？」

「最高だぜ。無駄なのに作ってるお前が最高に笑える。自分のは作っておいたか？」

「それこそ無駄なことだ」

「かもな。お前は墓にいれてやる価値もねえ」

「口の減らない奴だ」

「お前もな」

既に俺の手には刀が握られている。

「そろそろ名前教えてくれないか？今から消える奴でも名前ぐらいは知つときたいしな」

「俺に名前はない。貴様らを殺すためだけにこの世界に生まれたんだからな」

「何・・・？」

今コイツ何て言った？

俺達を殺すために生まれた・・・？

「どういうことだ？」

「俺を倒せたら教えてやるよ」

「そりゃ助かるぜ。絶対に教えてもらえるじゃねーか」

「行くぞ要」

「うん」

俺が言うつと要は大剣を出現させた。

「二対一でも結果は同じだ」

「そうだな。俺達の勝ちつて結果は変わらねえ」

「殺せ、オーガ」

「オオオオオッ！」

ドオンッ！

オーガは棍棒を縦に振り下ろした。

「おっと」

俺と要は左右に避けると俺は右から、要は左からオーガに斬りかかった。

「足に気をつけろよッ！」

「うんッ！」

蹴りをいれようとしてくることはわかってる。
ただし、どちらかにだけな。

確実に片方の足は攻撃できる。

立てなきゃコイツはただの雑魚だ。

知能も低そうだしな。

「オオッ！」

右足が上がる。

糞、やっぱ俺か。

「要ッ！」

「任せてッ！」

ザンッ！

「オッ！？」

オーガの左足が音を立てて切断される。

切れ味良いじゃねえか。

切断面から血が飛び散り、返り血が要の服を汚す。

ドゴオンッ！

「何ッ！？」

オーガがその場に倒れる。

すかさず俺はその巨体に入った。

「あばよ、ライオンさん！」

ザクッ！

勢い良く刀をオーガの心臓部に突き立てた。

「オオオオオオオオオオオオオッ！！」

オーガは最後に雄叫びを上げ、息絶えた。

と思う。

どっちにしろしばらくは動けないだろ。

「次はてめえの番だ。名無し野郎」

続く

第十六章「げーむおーばー」(前書き)

PC不調のため、非常に執筆困難な状況が続いておりました。
それ故に更新が非常に遅れてしまったことをここに深くお詫び申し
上げます。

今後も「」夢は現となりて」をどうかよろしくお願いします。

第十六章「げーむおーばー」

「オーガが殺られたか」

「余裕だな。あんなデカブツ」

俺はニヤリと笑って男に刀を向けた。

「オーガを倒した程度で俺に勝てると思っているのか？」

「オーガごときじゃ相手にならないからてめえに相手してもらっただよ」

つてかさつきからコイツとの会話嫌味合戦だな。

「良いだろう。すぐに終らせてくれる・・・！」

男の手には細身の剣が握られていた。

「要、コイツは俺がやる。手を出すな」

「うん」

そう言うつと要は後ろに下がった。

「行くぜ」

俺は刀を構えた。

俺が走り出すより先に男は俺に斬りかかってきた。

キーン！

俺は刀で剣を防ぎ、弾いた。

「ッ！？」

「喰らえッ！」

がら空きになった男の胸に刀を振り降ろすが、男はヒラリとそれかわした。

ゴッ！

「が・・・ッ！」

男はかわした後、即座に俺の腹部に膝蹴りを喰らわせた。

「美奈ちゃんッ！」

「美奈ッ！」

要達がこちらにかけよってくる。

「来るなッ！」

「でも・・・」

「コイツとは一対一でやらせてくれよ・・・！」

俺は態勢を立て直し、刀を構えなおした。

「まだやるのか？」

「勿論だ。あんなの痛くもかゆくもねえよ」

「やせ我慢を・・・！」

男はまた斬りかかってきた。

必至に刀で受けるがすぐに男はそれを弾き、更に斬りかかる。

明らかに不利だ。

戦闘の熟練度が違う。

太刀筋が・・・

鋭すぎるッ！

キンッ！

「ッ！？」

刀が手から離れる。

宙を舞い、地面に突き刺さる。

「しまった！」

「終わりだ」

剣を喉元に突きつけられる。

「く・・・！」

「これで最後だ」

「寝言は寝てから言えよ。まだ終わっちゃいねえ」

「この状況を打開する要素がお前にあるとは思えない。あるとすればそのプライドを捨てて向こうの小娘に助けを求めるぐらいだが・・・」

「

「それでも俺の剣がお前を仕留める方が早い」

「どの選択肢もバッドエンドじゃねえか」

「ハッピーエンドなどない」

「わかってるよ。全てがうまく行く選択肢なんて・・・そうそうな

いことぐらいな」

「わかつているなら諦めろ」

「全てが……だぜ？誰もこの状況は無傷で打開しようなんて微塵も考えてねえよ」

「……！？」

左手に血がにじむ。

ポタポタと地面に滴り落ちる。

「やっぱ痛えな」

「確かに……無傷ではないな」

「だろ？」

ブン！

握った奴の剣を思い切り飛ばす。

と言っても喉元から離れたただけだけどな。

「だあッ！」

ドンッ！

俺はそのまま思いきり男に体当たりした。

「ぐ……ッ！」

男がよろめいている隙に俺は刀を拾い、構えた。

「行くぜ！」

俺は男に斬りかかった。

男はそれを剣で防ぐ。

ギギギギギギギ……！！

「どうせ負けるんだからそろそろ教えてくれねえか？」

「この状況でよくそんなことが言えるな」

キンッ！

「何……ッ！？」

俺の刀が男の剣をはじく。

ザンッ！

男の右肩から血が噴き出る。

勝ったな……！！

「馬鹿な……！」

ドサリと音を立て、男はその場に倒れた。

「く……ッ！」

俺はすかさず刀を男の喉元に突きつけた。

「形勢逆転だ」

「フン……」

「つつかお前の負けだ」

「そのようだな」

ほんの少しの沈黙。

勝敗が決したことに気付いたのか、要達が駆け寄ってきた。

「美奈ちゃん！」

「大丈夫だ」

「それよりも……、教えてもらっぜ名無し野郎。知ってることを洗いざらい吐け」

「良いだろう。約束は守る」

「まずは……お前のことだ。何者だお前は？」

「俺は、貴様らを殺すためだけに由愛に生み出された者だ」

「由愛ちゃんが……？」

要が怪訝そうに聞く。

「ああ。理由は知らんがな」

「次だ。由愛は……アイツは何者だ？」

「わからない。ただこの世界を支配している。それしかわからんな」

「私にはそれがわからない。この世界は誰かの支配によって成り立っている世界ではなかったハズだ」

「そうよ、由愛って娘が何なのかはわかんないけど私達の世界を勝手に支配しないでくれるかしら？」

ベルゼブとミントという珍しい組み合わせ。

「それもわからない」

「お前何にも知らねえのかよ」

「わるかったな」

「まったくだ」

俺は呆れて溜め息をついた。

「最後の質問だ。どうせ知らないんだろうがな」

「由愛はどこにいる？」

「・・・・・・」

「答えろ」

「俺が答えずとも答えは出るだろう」

「ふざけるな。答えろ！居場所を知っているんだな！？」

「フン。知っているも何も・・・・。お前達の後ろだ」

バツ！

俺達が振り返ったその後ろには・・・

屈託なく笑った少女が立っていた。

「由愛・・・！」

「なあんだ。もう負けちゃったの？つまんなあい」

まるでゴミ箱に群がる蟻でも見るかのような冷たい視線で由愛は男を見る。

「さよなら」

パァン！

「なッ！？」

突然過ぎてただ驚くしかなかった。

今さっきまで会話していた男は跡形もなく消えていた。

風船が割れるような音とともに・・・

辺りに血をまき散らせて・・・。

ピッ！

俺の頬にも血がつく。

「何故殺した！？」

「遊び飽きた玩具をお姉ちゃんは捨てないの？」

由愛はニコリと笑う。

「何だか飽きちゃったなあ・・・・。もう終わりにしよ？」

「どういう意味だよ・・・・？」

「げーむおーばーってこと」

視界が突然変化する。

墓も、月も、オーガの死体も、全て消える。
白い世界。

最初と・・・同じ・・・！

「じゃあこれからこの世界と現実世界をゆづりつさせちゃいまーす
！」

続く

第十七章「世界」

「まあゆづごうさせるといっか・・・この世界が現実世界になっちゃう感じがな」

「おい待てふざけんなよ！話が違う！」

「何が？」

心の底から不思議・・・といった様子で聞き返す由愛。

「融合させんのは俺達がお前を見つけられずに死んだらの話だろ！？」

「えー。だって飽きちゃったんだもん。お姉ちゃん達中々来ないし」

「おま、飽きたって・・・！」

飽きた・・・。

実に子供らしく、単純で、わかりやすい理由だった。

「それにね、要お姉ちゃんはこっちのほうが良いんだよね？」

「な・・・！？」

要の方を振り向く。

要はやりづらそうにうつむいたまま何も言わない。

「本当なのか・・・？」

「・・・」

「何で答えない！？」

「あたしは・・・」

「要ッ！」

「よせ、美奈」

語気を荒げる俺をベルゼブが制止する。

「今は言い争っている場合ではない」

「く・・・！」

俺は宙に浮いている由愛を見上げる。

実に無邪気な表情をしている。

腹立たしいくらいだ・・・。

「何故こんなことをする・・・？」

「お姉ちゃんには関係ないよ」

背筋がぞつとした。

これが幼い子供の言葉か・・・？

発した言葉は問題じゃない。

問題なのはその言い方。

冷たい、しかしその冷たさの中に怒りがこめられている。

何なんだよコイツは・・・

「あんな世界。必要ない。でも全部消しちゃうのはつまんない。だから混ぜるの。あっちの良いところこっちの良いところを合わせて素敵な世界にするの」

何だ、良いことじゃないか・・・

って違う！

「そんなことしたら現実世界の人達はどうなる！？」

「基本的にはどうにもならないよ？私にとって邪魔な存在はどうなるかわからないけど」

「つまり融合させても支配するのはお前ってことだな？」

「そうだよ。当たり前じゃない。私のおかげで素敵な世界になるんだよ？」

「んな世界、素敵でも何でもねえ！お前がやろうとしてるのは世界の改善なんかじゃない、ただの独裁だッ！」

「うるさい」

「え？」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！」

「お姉ちゃんには関係ない！ただ見ていることしかできない癖に、勝手なこと言わないで！」

「勝手なのはお前だ、由愛！」

「喋らないで！」

「それはできない！」

「何で！？何で嫌がるの！？いなくなるんだよ！？うざったい大人達も、邪魔くさい法律やルールも！」

「そんな世界、間違ってる！」

「間違ってるなんかないもん！自由な方が良いに決まってる！」

「自由なだけじゃダメなんだよ！」

「わかんないよッ！」

「わかんなくても良い！いつかわかる時が来る、その時まで……」

「そんなの来ないよばか！」

「由愛、いい加減に……」

「美奈ちゃん」

不意に要が割り込む。

「あたしは、良いと思う」

「要……！」

「あたしも、あの世界には飽きちゃったから。毎日が同じことの繰り返し、気づけばつまらない世界の循環の歯車にされてる。そんな世界に何の価値があるの？」

「何言ってるんだ要！お前の言うことはともかく、由愛の言うようになれば世界は……」

「そんなことあたしだってわかってるよ！」

「要……」

「けどね！何か変わらなきゃダメなの！」

こんなに真剣な要は初めて見た。

呆けるようでこんな風に考えてたのか……。

「お姉ちゃん、どんなに言っても私がやめない限り世界の融合は止まらないんだよ？」

「ああ、そうだなそういえば」

「どうするの？」

既に俺の右手には刀が握られている。

答えは決まっている。

「力づくでも止める！」

俺は全力でダッシュして助走をつけ、由愛に向って跳んだ。

「おおおおッ！」

キイイイイイイイイン！

刀が由愛の目の前で止まる。

バリアのようなもので止められているようだ。

目には見えないが確かにそこにある。

「私はこの世界をしいししてるんだよ？例えるなら神様。神様に勝てるの？お姉ちゃんは」

「勝てる勝てないの問題じゃねえ！勝たねーと行けねえんだよッ！」
ガガガガガガガガガガッ！

刀とバリアのような何かがぶつかり合う。

硬えな・・・。

「斬れないよ。お姉ちゃんじゃガッ！」

押し負けた俺は地面に着地する。

「美奈ちゃん・・・！」

キンッ！

振り下ろされた要の大剣を刀で受ける。

「な、何すんだよ！？」

「お願い、もう邪魔しないで！」

「要エエエエエッ！」

ガッ！

俺は大剣を弾き飛ばした。

「あ・・・！」

「絶対にさせねえぞ・・・・・・・・。ココも、現実世界も守る！」

「私も同意見だ美奈」

「ありがとなベルゼブ」

俺は放心状態の要を見る。

大剣を弾き飛ばされた要は呆けた顔でこちらを見ている。
混乱して放心状態になったのか・・・？

「ミント、要を頼む」

「わ、わかってるわよ！アンタに言われなくなつて・・・」
「そうか」

俺はそれだけ言うともう一度由愛を見上げる。

「まだやるの？勝てないのに」

「同じことは二度言わねえ」

「そう」

由愛の周りに複数の黒く小さい円が現れる。

ビュビュッ！

同時に円から黒い物体が発射される。

全てが俺に向つて飛んでくる。

「ッ！？」

一部は避け、一部は刀で弾いた。

その場で跳び、由愛に斬りかかる。

キイイイイイイイイン！

「無駄なのに」

「ベルゼブ、お前何かできるか？」

「うむ、その刀に私の力を込めるくらいだな」

「何だ、できるじゃねえか。何で今まで使わなかつた？」

「疲れるからな」

そんなだけかよ。

「行くぜベルゼブッ！」

「うむ！」

刀に力がこもるのがわかる。

ベルゼブの野郎、こんな力を今まで使つてなかつたとはな・・・。

「うおおおおおおおおおおおッ！！！！！」

パキイイイイイイイイン！

「・・・ッ！？」

何かが砕けたのがわかる。

由愛の表情が驚愕で歪む。

「嘘・・・」

ザンッ！

斬った感触。

俺は今この刀で・・・

諸悪の根源であり、一人の少女である由愛を・・・
斬った。

俺が着地すると同時に由愛が落ちる。

不思議なことに血はない。

振り返ってみる。

由愛の体には確かに斬られた痕が残っている。

「嘘でしょ・・・私が・・・」

「融合を止める」

「止まってるよ、私がお姉ちゃんに斬られたその瞬間から」

「そうか・・・」

「なあ由愛」

「何？」

「一つ聞いて良いか？」

「良いよ」

「何でこんなことを？お前は一体何者なんだ・・・？」

「教えなきゃダメ？」

「今さら無理にとは言わねえ」

「良いよ。見せてあげる。私の記憶」

その瞬間、視界がブラックアウトした。

続く

第十八章「由愛の過去」

生まれなければ良かった

生まれさえしなければこんな思いはしなかったのに

私は何故生まれてきたの？

わからない

友達なんていない

親だっていない

あるのは毎日の食事と寝る場所

そして冷たい視線

みんな私を気味悪がってる

さようなら

私が死ねば良いんでしょう？

でも

ただじゃ終わらないから

由愛

ココは・・・？

真っ暗だ。

何も見えない・・・。

っつーか俺ってホントに存在いするのか？

変な意味じゃなくて・・・

この真っ暗な空間に俺は存在しているのかってことだ。

良いよ。見せてあげる。私の記憶

由愛から最後に聞いた言葉を思い出す。
じゃあこれは、由愛の過去？

「またココにいたのか？」

・・・。

「食事の時間だ。こっちに来てみんなと食べなさい」
「嫌」

「そんなことだからいつも一人きりなんだぞ？」

「私は、一人が良いの」

「・・・。食事は残しておくから、後で食べなさい」

そう言つて男はこの部屋から出て行つた。
私はこの部屋が・・・暗闇が好きだった。
誰もいない。

私だけ。

一人だけ。

孤独な空間。

誰にも邪魔されない。

私だけの空間。

食事は後で、一人でしよう。

あんなやつらとは食べたくない。

私は、物心ついた時からこの建物の中にいた。

私が私について知っているのは由愛という名前と両親がいないということ。

苗字すら私は知らない。

この養護施設と呼ばれる建物の中には私と同じ境遇の子供達が沢山いた。

みんな仲が良かった。

私も最初は中に混じつて遊んでいた。

ココには玩具も友達も、世話をしてくれる大人もいる。

その時の私にとってはまるで楽園だった。

家族を私は知らないけど、きつとココにいるみんなは家族にとっても近いものだと思っていた。

ある日のことだった。

私が庭でみんなと野球をしている時のことだった。

外野を守っていた私は、相手チームの男の子が打ったホームラン級のボールを追いかけていた。

ボールは私より速く、かなり遠くで落ちた。

既に男の子は三塁からホームへ向かっている。

「由愛ちゃん！急いでー！」

間に合うわけがない。

わかっていた。

それでも私は走って行った。

ふと思う。

ボールがこっちにくれば良いのに、と。

ビュッ！

何か白いものがこちらに飛んできたと思えばグローブの中にボールがあった。

「・・・」

私はボールをホームに向って投げた。

当然アウトには出来なかったけど私はさっき起きた不思議なことで頭がいっぱいだった。

ボールが自らこっちに来た。

あのボールは魔法のボールなのかとも思った。

それとも自分が魔法使い？

私は確かめるために食事の時、スプーンを呼び寄せてみた。

手が届かない位置にあったスプーンがひとりでに私の手に向かって動く。

不思議・・・。

カシャーン！

その時、皿の割れる音がした。

「お、お前・・・今何したんだよ・・・？」

野球の時の男の子だった。

「私ね！魔法が使えるんだよ！」

私はその時うつかりその子に喋ってしまった。

「ば、化け物・・・」

「え？」

「みんな！化け物だああッ！」

彼はひどく怯えていた。

混乱していたのだろう。

私のことを「化け物」と叫びながら逃げた。

その同様は他の子供達にも伝わった。

気づけば、私は一人だった。

親しかった友達も私を避けるようになり、優しくった大人達は私に冷たい視線を向けるようになった。

寂しくて寂しくて、私は一人で泣いた。

涙でも前も後ろも、右も左もわからなくなって、気がついたらあの部屋にいた。

暗くて、何も無い。

逆に安心した。

ココなら誰にも会わなくて済む。

夜。

そろそろ夕食の始まる時間。

ガチャリと、ドアが開いた。

「こんなところにいたのか・・・みんな待ってる。こつちへ来なさい」

違う。

この人は私を心配してない。
なんとなくだけどわかった。

この人の感情が伝わってくる感じ・・・。

イライラしてる。

私がないから。

「嫌」

「みんなが待ってるんだよ!？」

「待ってない。化け物の私が待たれるハズがない」

「何を言って・・・」

「こつちへ来ないでッ!」

「・・・。わかった。じゃあ勝手にしなさい」

言われなくてもそうする。

あんなに寂しい思いをするくらいなら、最初から誰もいない方が良

い。

こうして過ごすようになってからどれくらいが経っただろう。
最近では食事の時間に大人も来なくなつた。

私は好きな時にこの部屋を出て、食事だけはする。
後はずっとこの部屋で過ごす。

何も楽しくないけど、何も辛いもない。

そんな私の唯一の楽しみは、夢。

夢を見ている時だけは幸せになれる。

あの頃に帰れる。

いつも見るのは楽しかったあの頃の夢。

みんな仲が良くて、毎日が楽しかった頃の夢。

そして、唐突に現実に戻される。

ああ、夢が現実ならどんなにか……。

次第に夢を見る時間は伸びていく。

食事もほとんどとらなくなった。

現実何ていらぬ。

そうだ。

いつそ死んでしまえばずっと夢の中にいられる。

死のう。

死んで夢の中に行こう。

そうすればきっと私は幸せになれる。

そう思つた翌日、私は目を覚まさなかつた。

楽になつたんだ。

そう思った。

でもいたのはいつもの夢の中じゃなくて、白い世界。
何もない。

これじゃ色が違うだけで現実と同じ……。

「君は不思議な力を持っているね？」

「誰？」

「僕は君のパートナー」

「ぱーとなー？」

「そう。この夢幻世界では僕は君のパートナー」

「ふーん。興味ないわ」

「それより、君のその不思議な力で君を虐めた現実世界の奴等に復讐しないかい？」

「そんなことできるの？」

「できるさ。君の力なら」

私はこの時、コイツの口車に乗せられたのだろう。

この忌々しい力はこの支配無き世界、夢幻世界を支配するのに最適だったそうだ。

そして奴の言うようにあっさりと、私はこの世界を支配した。
というよりは、操れるようになった。

そして一つの世界を創ったり消したりできるようになった時、私はこの世界を支配したことを実感した。

「すごいじゃないか由愛。君の力はこんなに素敵なんだよ」

「ありがとう。あなたのおかげよ」

「ふふ……」

「そつえば名前を聞いてなかったわ」

「僕かい？僕はリベリア」

「そつ、リベリア。これからよろしくね」

「ああ。由愛、後はこの夢幻世界と現実世界を混ぜて素敵な世界にするんだ」

「素敵な世界？」

「そう。君の支配する素敵な世界。でもただ創るだけじゃつまらない。ついでにゲームをしようよ」

「げーむ？」

「そう、かくれんぼさ。昔よくやっただろ？現実世界か二人ほどの世界に連れてくるからさ。そいつらと君がかくれんぼするんだ。

君が見つかれば現実世界はそのまま。君が見つからなければ夢幻世界と現実世界は融合。面白いゲームだろ？」

「でも負けたらどうするの？」

「心配はいらない。不安なら君の力で殺し屋でも創って追いかけてせれば良い。それに、見つかったても融合させれば良いだろ？僕が見たいのは必死で頑張ってた奴が敗北して絶望するところさ」

こうして私は要と、美奈に出会った。

続く

第十九章「リベリア」

「お姉ちゃんさあ、現実世界に帰りたい？」

「・・・」

口ごもるセーラー服の少女を私は上から見つめる。

「お姉ちゃんもあの世界が嫌いなの？」

「それは・・・！」

まだよくわからない・・・といった様子だった。

「とりあえずさ、ゲーむしよう？」

「ゲーム？」

「うん。さっき説明したでしょ？お姉ちゃんが私を見つけれたらお姉ちゃんの勝ち。見つけれなかったら現実世界が大変なことになるんだよ？」

「・・・」

「あの世界が嫌いなら私を見つければ良いし、あの世界にまだ戻りたいと思うなら頑張つて私を見つければ良いんだよ」

「・・・。わかった」

「そういえばお姉ちゃんさ、名前ある？」

「え・・・？なくはないけど・・・」

「私がこの世界で暮らすための新しい名前を上げる」

「新しい名前・・・？」

「要^{かなめ}でどうか・・・？要お姉ちゃん」

「要・・・？」

「そう。前の自分なんて捨てて新しい自分、要としてこの世界で暮すの」

そこで映像は途切れた。

気がつけば元いた場所に戻っている。

「リベリア・・・！」

「どうだった？」

「どうだったも糞もねえ。お前はただの被害者じゃねえか！」

「そうかな・・・」

「由愛、支配も融合もやめて普通に暮らすんだ。お前が望んだのは現実世界とこの世界の融合なんかじゃなかったハズだ」

倒れたままの由愛の目から涙が溢れる。

「そう・・・だよね・・・違うよね・・・どこで間違っちゃったんだろう・・・私・・・」

「間違いは正せる。まだ取り返しのつかないことにはなってない。

間違いだと気づけた時点で正せるんだ」

「ありがとう・・・お姉ちゃん・・・」

俺は泣きじゃくる由愛の身体を抱き上げ、その場に立たせた。

「斬ったりして悪かったな」

「ううん。悪いのは私、止めてくれてありがとう」

「礼には及ばねえよ」

そんなことより・・・。

「リベリア・・・ッ！」

俺が語気を荒げたせいか、横で由愛がビクつく。

「いるんだろ・・・ッ！？どこかで見てんだろ・・・！？こんの糞野郎がア・・・ッ！」

「糞野郎だなんて・・・。口の悪い女の子だ」

慌てて振り返れば、そこに奴はいた。

左目を隠すようにつけた前髪、額の右あたりに生えた角、背中にはコウモリのような羽、爬虫類のような尻尾。

間違いない。

コイツが・・・！

「リベリアッ！」

由愛が叫ぶ。

「ダメじゃないか由愛。負けたりしちゃあ」

「聞いてリベリア！私は・・・」

ズボッ！

リベリアは右手を由愛の身体に突っ込んだ。

「え・・・？」

「ああ、いいよ、説明しなくて・・・。見てたから」

ズポリとリベリアは由愛の身体から手を引っ込めた。

ドサリと由愛はその場に倒れる。

「由愛ッ！由愛ッ！」

俺は倒れた由愛を必死で揺さぶる。

「ああ、心配ないよ。死んじやない。力を失っただけだから」

「リベリア・・・ッ!!」

リベリアの右手には発光する白い玉が握られていた。

「それは・・・？」

「これかい？これは彼女の力そのものだよ」

そういうとリベリアは口を大きく開け、玉を飲み込んだ。

「ああ・・・。良い感触だ・・・。力が湧いてくる・・・ッ！」

「これで彼女の手を借りる必要はなくなった・・・。僕が、僕がこの世界を支配し、現実世界と融合させ、神となるッ!!!!!!!!!!」

「させるかよ・・・!!」

俺は刀を構えた。

コイツがラスボスかよ・・・!!

「できるのかい？君ごときが・・・神を倒せるとでも？」

「悪いが似たような台詞を言われて勝ったばかりだからな。不可能だとは思わない」

「試してみるかい？」

「望むところだッ!!!!!!」

ガッ！

俺の振り下ろした刀をリベリアは右腕で受ける。

なんつー硬い腕だ・・・。

「あははははははははははッ！！！！無理無理無理無理無理無理
イツ！！！！！！！！！！」

ゴッ！

リベリアの左の拳が俺の腹部に食い込む。

「か・・・は・・・ッ！」

「美奈ッ！」

「大丈夫だベルゼブ・・・。それよりアイツのことわかるか？」

「リベリア・・・。かつて夢幻世界を支配しようとした高等悪魔だ。
奴はこの世界を追放され、現実世界と夢幻世界の狭間で封印されて
いたハズだが・・・」

「彼女の瘴気に当てられて復活しちゃったのかもね？僕でもよくわ
からないんだけどさ・・・！」

そういうとリベリアは宙に浮いた。

「まずいッ！」

リベリアの周りに黒い円が現れる。

「くらいな」

ビュビュッ！

黒い物体が円から発射される。

由愛と同じ技か・・・！

一部を避け、避けきれないものを弾こうとした時だった。
ドッ！

「な・・・ッ！？」

黒い物体が背中当たる感触・・・。

後ろから！？

「馬鹿な・・・！」

倒れかけたがなんとか膝をつくことができた。

「追尾ぐらいできないと・・・。由愛は本当に使いこなせてなかつ
たんだね・・・」

よろめく身体を刀で支え、立ち上がる。

「美奈、リベリアのあの力は由愛のものだ。まだ完全には身体に馴

染んでいないハズだ。お前でも奴と同じ方法で取り出すことができる！」

「了解。行くぜベルゼブ！」

「無駄だよ！そんな隙は僕には……」

「ハアアアアアアッ！」

ズブッ！

「ッ！？」

リベリアの身体に突き刺さる大剣。

「要ッ！」

「はやくしろッ！晃ッ！」

「要……？何で俺の名前……」

「ふざけるなよ貴様アアアッ！」

リベリアの腕が要の身体を貫く。

「が……ッ！」

「要エッ！」

「俺のことはいい！早くコイツから由愛ちゃんの力をッ！」

「お前……」

「いいから早くッ！」

「要、俺さ……。元の世界に戻れたら真面目に授業受けようと思うんだ……」

そう言うとき、要は苦しいハズなのにニヤリと笑った。

「寝んなよ？」

「わかんねえッ！」

ズボッ！

俺はリベリアの身体に思い切り右腕を突っ込んだ。

続く

第二十章「戦いの終焉」

「があああああああああああッ！」

俺はリベリアの身体の中から由愛の力そのものと言われる白い玉を取り出した。

そして急いで由愛の中に戻す。

「じゃあな、晃……」

「要ッ！」

リベリアが腕を引き抜く。

要の身体には丁度腕が入る程度の穴が空き、そこからドボドボと血が流れている。

「色々ありがとな」

「待て！要！死ぬなああああああッ！」

「授業、寝んなよ？」

要の身体が少しずつ消えていく。

「あ、ああ……！」

今気づいたんだ。

そいつが、要が一番大事な友達だったことに。

「要エエエエエッ！」

消えた。

完全に。

この世界から。

要が……！

「貴様らアアア……！ただで済むと思うなよ……ッ！」

俺は真つすぐに、リベリアに向き合う。

「なあ、この世界で死ぬってことは現実世界でも死ぬってことだよな……？」

「それがどうかしたか小娘エエエッ！」

「お前が……お前が要を……ッ！」

「たかが小娘が一人死んだくらいで一々うるさいんだよッ！」

「たかがだと・・・？ テメエふざけんなよッッッ！！！！！」

頬が濡れる感覚。

前がよく見えない。

涙。

涙涙涙。

「リベリアアアアアアアッ！！！！！」

「テメエだけは死んでも殺すッ！ 覚悟しとけッ！！！！！」

「できるハズがないだろう小娘エエッ！ お前を殺して僕は再び由愛の力を奪うッ！」

俺は刀を構え、リベリアに斬りかかる。

リベリアはそれを避け、俺の頭めがけて回し蹴りを喰らわせようとする。

俺はすかさず左腕でそれを受けた。

リベリアは足を戻すと一度距離を取った。

「まともに戦っても勝てるが・・・お前は苦しませて殺す・・・！」

リベリアは左目を隠した前髪を上げた。

「まずいぞ美奈ッ！ 見るなッ！」

俺はとつさに目を閉じた。

視界が消える。

「チッ！ 知っていたか・・・」

「一体何なんだ？ ベルゼブ」

「奴の左目は魔眼だ。炎眼えんがんと言ってな、見た者の身体を焼き尽くす呪われた眼だ」

「博識だなジジイ・・・！ だがな、苦しませる方法は別にこの眼じやなくていいんだよ・・・。視界を奪われ、まともに動けないお前をなぶり殺すッ！ それで満足だ・・・！」

ゴッ！

「ぐッ！」

腹部を殴られたようだ。

激痛が身体を走る。

「ひやはははははははははッ！死ねッ！苦しんで死ねエエエッ！このゴミ虫がアアアッ！」

ガッ！

ゴッ！

身体の様々な部分を殴ったり、蹴ったりされているようだ。

「どこにいるかわかんねえだろ？わかんねえよな？わかるわけねえよなアアアッ！？」

「糞野郎が・・・なめてんじゃねえええッ！」

「なッ！？」

目を開いた。

業火に焼かれることも承知で・・・。

「おおおおおおおおおッ！」

「何故走れる！？今までこの眼を見た奴らは・・・焼かれる苦痛で動くことすらしなかったというのに・・・！」

「焼かれても動けるほど teme が許せねえってことだ馬鹿野郎ッ！

！！」

ザクッ！

「うがああああああああああああああああああああああああああああッ！」

刀が、リベリアの眼を貫く。

「よくも、眼をオオオオオオオッ！」

「どうせ teme は心臓刺しても生きてんだろ？眼は潰させてもらったぜ！」

「確かに高等悪魔はその程度では死なんが何故わかったんだ美奈」
「勘だ」

いつの間にか俺を焼いていた火は消えていた。

「終わりだリベリアッ！」

「まだ終わらねえよ・・・！」

不意にリベリアが片手を上に向ける。

「これだけはやりたくなかったが・・・仕方ねえ。この命を代償に全てを終わらせてやる・・・!」

「やめろリベリアッ! そんなことをすれば、夢幻世界はおろか、現実世界まで崩壊しかねんぞ!？」

「うるせえ糞ジジイ」

「何なんだベルゼブ!」

「エンド・オブ・ワールド。全てを破壊する死の大魔術だ」

「な・・・ッ!？」

もしそれが本当なら大問題だ。

「終われエエエツ!」

「終わるのは貴方よりベリア」

不意に聞こえる声。

「由愛!？」

由愛は俺の方に歩み寄って来る。

「貴方と私は一心同体。そうよね？」

「な・・・由愛・・・! 何をする気だ貴様・・・!？」

「要お姉ちゃんが死んで、ミントが消えたでしょ？」

そういえばミントはいない。

つてまさか!

「おい由愛!」

由愛は俺の手から強引に刀を奪い取った。

「私は、お姉ちゃんにすごく感謝してる。お姉ちゃんがいなかったらきつと私・・・」

「由愛!」

「ありがとう」

ザクリと、刀が由愛の身体に突き刺さる。

「由愛エエエツ!」

由愛の身体が少しずつ消えていく。

「馬鹿な・・・! ふざけるなよ・・・!？この僕が、こんな小娘共にイイイイツ!!!」

それに比例してリベリアの身体が消えていく。

「ありがとうお姉ちゃん。さよなら」

「由愛エエエエエエツ!!!!!!!!!!」

消え・・・た。

要も、由愛も、リベリアも・・・。

「何で俺だけ残ったんだよ・・・!」

「美奈・・・」

「ッ!？」

突然視界が変わる。

白かった世界が、黒く・・・。

続く

第二十章「戦いの終焉」（後書き）

〓夢は現となりて〓も次回で最終章です。

ここまで読んで下さった読者の皆様、どうかもう少しだけお付き合い下さい。

最終章「真実」

ここ・・・は？

辺りは真っ黒だった。

何も見えないわけではない。

ただ世界が黒いだけ。

「ベルゼブ、どこだよここは・・・」

「・・・」

ベルゼブも答えられないのか・・・？

ここはホントにどこなんだ・・・？

全てが終わったんだ。

だから俺は現実世界に戻るハズなのに・・・。

まだここは夢の世界のようだ・・・。

「来たか・・・」

「！？」

不意に聞こえる声。

気がつけば目の前に一人の男がいた。

「お、お前は・・・」

見覚えのある顔だった。

いつも見ている顔。

「ベルゼブ！？」

巨大なベルゼブがそこにいた。

いや、巨大というのは不適切かもしれない。

普通の人間と同じサイズのベルゼブが目の前にいたのだ。

「どういうことだよベルゼブ・・・」

「私は本体ではない」

は？

「私はその本体からコピーされた偽のパートナーだ」

「んじゃそこにいるデカいのが俺の本当のパートナーってことか？」

「それは違う」

「じゃあどうということだよ!？」

イライラしてきた。

訳わかんねえよ。

「そいつは、俺のパートナーだ」

もう一人男の声。

何なんだよ次から次へと・・・!

デカイベルゼブの横に現れた男にも見覚えがあった。

というか見覚えがあるとかないとかそういうレベルの問題じゃない。

「・・・俺？」

河合晃。

今の俺、美奈の姿ではなく正真正銘俺の真の姿。

「どうということなんだよおいッ!」

「こういうことだよ」

目の前の俺は冷静に答える。

「お前は偽物ってことだ」

「んな・・・!？」

「ざけんな!俺が本物だ!お前が偽物だろ!どう考えても!!!」

「お前は俺じゃない。だから偽物ですらないな」

「何なんだよお前!どうということなんだよ!？」

「お前は俺が夢幻世界に連れ込まれた際に偶然できた俺のコピーだ」
うるさいうるさいうるさいうるさい

「正確には俺の記憶の一部がコピーされてできたものだ」

うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい

さい

「何で姿が姉さんなのかはわからないが・・・」
・・・。

姉さん?

「待て、俺に姉さんなんていたのか？」

「それがお前がコピーである証拠だ」

「お前の見てきたものは全て俺にも伝わっている。由愛やリベリアと戦っている時に何度かベルゼブの力で中に入ろうと思ったんだが……強い力で防がれてた。だからベルゼブのコピーを通じて俺と本体のベルゼブの力を送るくらいしか出来なかったんだ……」

カワイコウハタンタントカタッテイル

キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ
キエタクナイ

俺は確かに夢幻世界に行った。

それは事実。

何故なら実際に俺のクラスの親友が一人、ベッドの中で眠るように死んでいた。

当然泣いたし、葬式にも行った。

助けられなかったことが本当に悔しい。

そいつが要だった。

それが証拠だ。

それに、あの後調べてみたところ、俺の住んでる町の近くの養護施設で大城由愛おおしろゆめって女の子が眠るように死んでいたことについて書かれた新聞が見つかった。

流石はマスコミ、苗字をちゃんと調べてるな・・・。

その女の子が夢幻世界であれだけのことをし、俺が今暮らしている世界が大変なことになっていかけたというのに、世界は何事もなかったかのように回っている。

だから俺も何事もなかったかのように暮らす。

何事もなかったかのように・・・。

終

最終章「真実」（後書き）

ここまで読んで下さった読者の皆様、ありがとうございました。
連載を始めて半年間、続けることができたのは皆様のおかげです。
よろしければ読んだ感想や評価をいただければと思います。
本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8428d/>

～夢は現となりて～

2010年10月8日23時28分発行